腐った日々の消費を謳歌する日常

雨宮天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
腐った日々の消費を謳歌する日常

【Ｎコード】
Ｎ９０６８Ｓ

【作者名】
雨宮天

【あらすじ】
四人の登場人物。
他愛もない日常を淡々と描く。
アンチ「ファンタジー」の作品です。

日常の一角。（前書き）

基本的になんとなくで戦ってます。
意味不明な意識でつるんでます。
でもそれがいいと思ってます。
作者は西尾維新のファンす。

日常の一角。

「感慨なる時空」と称されるこの俺こと『蓮回（れんがい）　時空（ときあき）』は只今もの凄い状況に陥っている。体中を無数の微痛の走る傷に覆われ、ベレッタと呼ばれる人殺しの小道具を右手で深く握りしめてグリップの表面には手汗が滲んでいる。その歪に黒を光らすその銃の表面は死体と同じほどひんやりとした低温を持っている。ベレッタという自動拳銃に一度（誤射すると危ないので）「安全装置」を掛け、右手の手汗を砂で汚れたワイシャツで拭きとりまた握り直す。グッと腕を通り越して肩にまで達する重さを実感する。人を殺す重さ。命を奪う重さ。ソレを行うものが待機する重さ。ソレを打ち出すのに必要な重さ。何度持っても慣れの来ないこの感覚に多少の戸惑いを覚えながら背後の壁に背中をゆっくりと預け、腰の上辺り――両手でグリップを握り重心近くに拳銃を持っていき、いつでも構えの姿勢をとれる体制をとる。

はぁはぁ…と口で一定の規則正しい呼吸をおこない先ほどから鼓動の加速が止まらない心臓を落ち着かせようと努力する。また、グリップを持ち直す。ここはある学校の一角、曲がると階段のあるスペースだ。

『カツン――…カツン――…カツン――…』と廊下にヒールの甲高い音が響き渡る。音だけを聞くと相手との距離はまだ離れている。

これが俺の敵「無情なる友情」とされる（矛盾するのかもしれないが）俺の友達『壱奈岐（いなき）　友（とも）』である。

――――カツンッと足音は俺が背を預けて隠れている壁のすぐ傍で停止した。

さぁ、始めようか。

かぁと体中が熱を帯びるのが分かる。ついでにアドレナリンが脳から分泌されるのを理解する――――前に、右手の甲を上にして壁から身を瞬時に右に乗り出す。体全体を一気に壁から出すのではなく、

一瞬、一瞬のラグで拳銃から乗り出す。相手の補足が優先事項だからだ。身体を全て出してからの相手の補足では一蹴されるのがオチだろう、――――相手の姿を目の端で捉えると、乗り出して――立ち止まらず廊下を突っ切るように重心を前に向け前のめりになりつつ先ほど右手の甲を上にして構えたベレッタの引き金を迷わず引く。
　すると引き金を引くと遊底がジャゴッジャゴッとスライドされ、火薬が発火し、ズドォンと腹に響くけたたましい音を立てながら弾丸が射出され、敵をハチの巣にした。

　はずだった。俺の引いたトリガーは固く固定されビクともしなかった。
「安全装置を外し忘れるなんてどこの漫画のキャラクターだい？」
　少し低めの、それでいて女性の音色のその声の主は、自衛隊が使うという格闘術で俺の手から拳銃を振り落とし、脇腹に目にも止まらぬ強烈な足突きを放った。思わず口が開き、がぁ！！とかいうあえぎ声を上げて蹴られた個所を手で押さえこみながら倒れた。俺は。心臓が今までにない早鐘を打つ。

「まったく、お話に成らないね。じゃあ、死になよ」
　彼女は《無情》にそう言い、一瞬前まで俺の所有物だったベレッタを床から拾い上げ、安全装置を上げてそして――――…。

「ぶふぅ！！あはははっ！！！」
　いつもは絶対にしないようなミスを犯した揚句に俺は無情にも自らの持っていた武器でＰＫ（ＰＬＡＹＥＲ　ＫＩＬＬ）されて綺麗な紅色の桜を頭で作って死んでいた。そう、このテレビゲーム『ＤＥＡＤ　ＫＩＬＬ　→　ＡＲＩＶＥ』の俺の扱っているアヴァターが。無残にも。

オンライン対戦成績一位の俺のアヴァター《ｓｐａｍｅ》が次点の二位の友のアヴァター《ｏｒｉｎｄ》に殺されたという事だけなのだが。彼女のアヴァターは二つ名を持っている。

一つは「無情なる友情」、これは俺達の間のオフ専の二つ名。二つ目は「能動の挫折させる土下座」。対戦相手を挫折するほどコテンパンに打ちのめす所と彼女のハンドルネーム《ｏｒｉｎｄ》に由来する。ｏｒｉが土下座している茂田井だからだ。まぁ単なる洒落と言ってもいい。

「まさか『感慨なる時空』様（笑）が安全装置を解除し忘れるとはねっ……ぶっはははははっ！！！」

「（笑）！？」

さっきからあほみたいに腹を抱えて笑っている彼女こそが友である。見た目は清楚な黒髪美少女でお嬢様的風貌なのでこんなテレビゲームなど興味ないように見えるが、このゲームは彼女の所有物なのである。

ゲーム大好き漫画大好きライトノベル大好き下ネタ大好きな彼女なのである。

「よーかったねぇ、これがオフで。オンだったら笑いモノだよ」

まだ詰るかこいつは。

俺はしかし強く言い返せないので話を反らし、打ち負かすためにもう一度対戦しようという旨を伝え、今度こそはとゲームのコントローラーを握った。

キーンコーンカーンコーンと授業の終了を示すチャイムが夢現だった俺の精神を現実に強制帰還させた。四時間目の授業は英語であり、俺の最も嫌いとする教科でもあった。苦手と嫌いは違うとよく言うがよく言ったものだ。全く持ってその通りでる。何故ならば俺は英語は凄い出来る。テストは中学から高校の現時点までオール百

点である。そんな俺がどうして英語を嫌うのか。それは俺が英語が『出来すぎるから』だ。出来すぎて、面白みの欠片も無く、退屈で嫌気がさす。そんな所だ。

言っておく。けして不真面目ではない。ノートだってしっかりとっているし、授業中は居眠りなどはせず、発表だって自分からする。で、だ。どうしてそんな俺が嫌いであるが凄くできて真面目に受ける英語を夢現で受けていたかというとそこには深そうでとっても浅い浅はかな事情があった。

「……はぁ」

ここで一度深く溜息を突くことにしておく。

日々の減衰風景。（前書き）

ようやくここの次の話から始まる予定です。
本編が。

日々の減衰風景。

キーンコーンカーンコーンと授業の終了を示すチャイムが夢現だった俺の精神を現実に強制帰還させた。四時間目の授業は英語であり、俺の最も嫌いとする教科でもあった。

苦手と嫌いは違うとよく言うがよく言ったものだ。全く持ってその通りでる。何故ならば俺は英語は凄い出来る。テストは中学から高校の現時点までオール百点である。そんな俺がどうして英語を嫌うのか。それは俺が英語が『出来すぎるから』だ。出来すぎて、面白みの欠片も無く、退屈で嫌気がさす。そんな所だ。

言っておく。けして不真面目ではない。ノートだってしっかりととっているし、授業中は居眠りなどはせず、発表だって自分からする。で、だ。どうしてそんな俺が嫌いであるが凄くできて真面目に受ける英語を夢現で受けていたかというとそこには深そうでとっても浅い浅はかな事情があった。

「……はぁ」

ここで一度深く溜息を突くことにしておく。

「感慨なる時空」こと蓮回時空は現時点では高校二年生である。因みに、「無常なる友情」と称される壱奈岐友も同校の同輩であるし、更には「空虚と有限の重荷」と「幽霊且つ幽霊」も俺と同(おな)いである。一応、一通りだがあと二人登場人物が登場すると伏線を張ったところで話そうと思う。

命にまで関わろうとしている生徒会を。

俺が所属している高校――名前を「公立月波子(つきはし)高校」と言うのだ

が、この高校の恐ろしさを入学してから知ることに俺はなった。
まぁ俺が体験した恐怖を話してもいいのだが長いのでそこは置いておくとして、今置かれている俺の状況から説明したい。
公立月波子高校は有名である。県内屈指の超ハイレヴェルの進学高校であることは知っていただきたい。そして隠れた有名な話。
――いや、隠蔽されている有名な話がある。それが《無情生徒会》である。
「はぁ？」と聞き返したくなる気持ちがふつふつと沸騰して湧き出ることは安易に想像できる。だったら俺はその中に岩ほど大きい沸騰石を投じたい。それほど意味が分からないからだ。まぁ説明しよう。この学校の先生は全員が全員、揃いに揃って変わりモノである変わりモノなのだ。同じ言葉を乱用しすぎてゲシュタルト崩壊しているのかもしれないがするーっと。普通一般なら校長先生が変わりモノ――とか学年主任が変わりモノ――――程度である。だが、全員と行くとなると、これは想像を超越する。
絶するなんてものじゃない。ただ気持ち悪い。気持ち悪いの階乗くらい気持ち悪い。
そして極めつけは学生も学生で変わりモノが多いのだ。そしてそのハイエンドには二つ名がつくほどに。
まぁ俺もその群衆の一人と数えられるかもしれないが俺は自分では常識人だと思っている。話が逸れた。そしてその学生らの頂点に降臨しつつも君臨する生徒会、そしてその頂点たる生徒会長は超ド級の変わりモノなのである。はぁ、ここまで話すと後は大体察してもらえるだろうか。
つまりは、その生徒会長に誘われたのだ。次期生徒会長をしてくれ、と。迷惑極まった話である。
会長曰く、
「ビョフビョフビョォーフッウウウウウウウウウウウウウ！！！！！！！！！！、チョッチ次の生徒会任せるコンニャクゼ〇ー」
回転しながら言われた。超ドヤ顔で。唖然としたね。…死ねばい

いのに。あと腰をもの凄い速度で前後に振ってたなー。だけど、その会長は世界を股にかける超美人の女優なのだ、という落ちがつく。残念美人というやつだ。もしくは只のビッチ。

話を戻そう。

だが断ることはできないのだ。この学校の数少ない校則（変態ばかりなので校則は少ない）の中の一つとして生徒会長の言ったことは絶対というものがある。誰だ、そんなアッポンタンな校則を創ったのは。俺が拘束されちまったじゃねーかっ！！！この怒りはまっとうなモノであると俺は信じている。で、日夜命の危機にさらされているという訳だ。分かっていただけたかな？

「わーかーるーかーボケッ！！」

ズドンッ！！と上から下を貫くもの凄い衝撃が俺の後頭部を駆け抜けた。ついでにガンッ！！と額を机に打ち付けた。さらについでに教卓に立っていた先生がドン引きしていた。唾液が口から洩れてきらきらと光が反射している。あー、汚綺麗（きたなぎれい）だなー。

この行動に合わせたように昼休みの時間に食事を摂る真面目な生徒は俺たちを腫れものを扱うように無視し、さっさと教室を出ていく。ま、当たり前の反応か。てなわけで教室は静まりかえりましたとさ。

「エム年エム組エム番のイニシャルがエスエムの君には丁度いい快感たりえ得る刺激じゃないのかい？」

そして左側から酷く心外な言葉を一方的に吐きかけられた。

「どんだけエムなんじゃあーっ！！」

ついキレてしまった。いつもは温和と名高いこの俺が。コレでは名ばかりになってしまうじゃねーかっ。一つも一致しない虚言を吐き散らかすしな。

「おっと、トキが払拭し切れていない快感を持て余して興奮のあまりキレてしまいましたよ、どうしますトモ？」

「乙夜違うよ、『感慨なる時空』は快感を払拭し切れていないんで

はなくてもっとくれと誘っているんだよ」
「あぁ、なるほど。流石はトモ。トキの事となると詳しいですね」
「んなわけあるかいっ！！」
「なんだよっ、これも振り？――だったらぁ…」
「ぐふぅっ、刺さってるって、肘っ、刺さってるって、脇腹に――」
「日々の鬱憤を晴らさせてもらうっ！！」
「晴らすなぁー！！」
「おやおや、これ以上もなく性懲りもなく公衆の面前で快感で恍惚の表情を浮かべているねぇ、流石は次期生徒会長となる変態さんだことッ」
「感慨なる時空はビッチなの、知らなかった？」
「あたしには理解しがたい分野ではあるわなー、セノ〇ビッチ君ッ」
「お前らそろそろ酷いぞっ、泣くぜ俺」
「ほら、もう一発イっときなよッ！！」
「なんかその言葉の片仮名発言はおかしくないか！？」
どれだけ俺はエムなんだ。
俺は局部をガードした。だって咲良が大きく足を振りかぶっていたんだ。振り子の要領で行くならば恐らく接触地点は…恐ろしい。
「空虚と有限の重荷」――『空垣（そらがき）　咲良（さくら）』。
「幽霊且つ幽霊」――『荒峰（あらみね）　乙夜（いつや）』。
いつだってこいつ等は俺に対して否定的なのである。
「何度も言いますけれど、被害を被っているのはトキだけじゃないって事を理解してほしいですよ。僕たちだって十分、――十全に鬱陶しい思いをしているんですから」
一通り御約束をしてから乙夜は切り出す。確かにソレは言える。
「そうそう、トキアは生徒会長の冷夏（れいか）先輩から、あたしは副会長の源氏（げんじ）先輩から、イツは庶務兼会計の弦姫（つるぎ）先輩から、友は庶務兼書記の衒守（てらがみ）先輩から『押しつけ』られたんだから」
そう、実質俺達は押し付けられたのだ。生徒会の状況が悪化して、行き詰まり、苦肉の策であり最悪の策に巻き込まれたのだ。

「ま、私はそうでもないけど。格闘術はほとんど網羅しているしぃ、自衛隊隊員程度なら相手にできるほどの実力は持っているつもりだしねっ」
「例外は置いておこうぜー」
ちょっと一人だけ良い思いをしていそうだったから度外視な無視をしてみた。だってイラッてきたんだもん☆（笑）。
「むっ」
「まーまー、むっとしないでサクラ」
「友が言うのなら…」
おい、俺以外の仲はかなり盤石なんじゃねぇのかもしかして…。ショックだ。
「話を脱線させないでいただきたい。僕達のすることはあまり多くないですし」
乙夜は椅子の背の部分に胸をあてるようにして俺の方を向くようにする座り方で右手を開いた。前には友が、後ろには咲良、そして右には乙夜という位置で話は進行する。
乙夜は右手の親指を折る。
「一つは周辺の高校にある程度の権限を与える」
次に人差し指を。
「二つは潔く借金を返す」
中指を。
「三つは校長を使う」
薬指を。
「四つ以降は———ない、三つだけだね」
三つ…か。少ない、少なすぎる。これでは状況の打破など起こり得ない。
「もう諦めるって選択は四つ目に当てはまらないのかな？」
咲良は言う。
「そらぁ出来たらそうしたいけどな、そういう訳にもいかないんだよ。なんつったって生徒会は『周辺の高校の一年間の予算を使いき

っちまった』んだからな」
「ふぇっ、そうなの？そーれはやばいね、けれど生徒会ってそれ程の予算を何につぎ込んだのかな？」
　ここでどうして周囲の高校から予算を巻き上げれるのか聞かないところがこの学校のいけないところだと思う。
「『ＤＥＡＤ　ＫＩＬＬ　→　ＡＲＩＶＥ』の開発資産に全力投球全力投資」
「馬　鹿　で　し　ょ　！　！　！」
「そうは言ってもさ、俺達はワンツースリーフォーでオンラインランキング上位を独占してるだろー。つまりはしっかりとその恩恵に肖っているって事だ。どういう意味か分かるよな」
「生徒会の意向に参加している…ってことになるよ。これじゃ弁解も不可能、行き詰っているってことになるというところでしょ」
「どうするのかなぁ…、次期生徒会長サマは…」
「おいおい、そりゃないぜ咲良。ここは皆で協力っていう王道の展開が展開されるところじゃねえか？」
「「「そんな慈悲はない」」」
　口をそろえて断言されてしまった。万事休す。驚天動地。
「一体然体どうなってることやら…俺達の地域の地方公共団体は」
　月波子高校が所属している地方公共団体は率直に言って月波子高校を拡大して拡張して地方公共団体とは名ばかりの役所に張り付けたような組織だ。モットウは自由主義。裏を返せば放任主義。更に返せば放置主義。だからこんな事になっているのだ。
　条例――というのを知っているだろうか。いや、俺も明確に説明せよとか言われるとムリだが大体おおまかな内容は理解しているつもりだ。条約の縮小版が条例。この認識で大抵はいいはずだ。地方公共団体がその地域に対して下す条約が条例。そんな所だ。それで、俺達の学校の校長でもあり地方公共団体のトップであり『ＤＥＡＤ　ＫＩＬＬ　→　ＡＲＩＶＥ』のメーカーの社長でもある大物の月波子　蝉はこういったのだ。

「この地域に属する高校・中学・小学の教育機関に振りあてられる予算・所有可能な権限は全て学生の受ける学力テストによって決める」
と。
実力主義はさることながらこれではまるでヒンドゥー教のカースト制度のように必然的になってしまう。上からブラフミン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラと。噛み砕いて言葉を解釈するなら司祭、王族、平民、奴隷なのだが。これが教育機関でなりたってしまうのだ。これは言うだけならば簡単だが、自らがその状況下におかれるとかなり厳しいものとなる。
カースト制度――――または食物連鎖のピラミッドとも変換できる。
――弱肉強食。
――――強者こそが正義。強者こそが善。強者こそが統括者。
――――弱者は淘汰される。弱者とは悪である。弱者は支配される奴隷でしかない。
これが、実力主義の教育機関の社会。
そして月波子高校はその実質的トップであるのだ。権力・権限の統括。資金の過剰割り振り。生徒に対する優遇待遇。その他諸々。トップの高校は周辺高校から睨まれ、うとまれ、嫉妬の対象とされ、羨ましがられる。只でさえ敵は多いのだ。常に背水の陣状態。ソレを踏まえてのこの愚行。目も当てられない状況だ。
「……相手は本気です」
乙夜はぼそりと呟く。
「違う。相手は初めから本気なんだ。いつも本気で、俺達に踏襲され続けた。だから俺達を…次期生徒会役員を脅すために襲ってきている」
「そうだね、本気だからこそ――後ろめたさも無くこっちを襲撃してくる。権限の譲渡と予算の返却を」
「僕の収集した情報によるところでは他の高校――――太吹学園、清凛高校、西ヶ丘高校、聖洋女子学園、室十高校、そしてこの条例が

出来て一代目のトップだった学陰学園の六校が脅迫まがいを行っているとみて間違いないでしょう」
「始原の覇者――学陰学園か。けれどそ学陰学園も随分と昔の栄光にすがりついているもんだな…」
「滑稽だね」
「言い過ぎだよ友」
相手の悪口を言って解決する程度の問題ならとっくの昔に解決しているはずだ。こちらからすれば周りは全て敵。まさに背水の陣。しかし相手からすればこの月波子高校以外は味方――協力者と捉えるだろう。互いに頂点の座を貪っている無法者を引きずり降ろそうと躍起になっているのだ。まず俺達を――月波子を引き摺り下ろすことに重きを置いている。だから牽制し合う事もなくこちらを脅してくることが出来る。大方――六校共同の会議でも秘密裏に行っているのではないのか。俺のその検討では――。
「俺達の高校を合わせた七校の内、西ヶ丘高校は一番スポーツに重点を置いている学校だろう。最近――ソイツらの襲撃が一番調子に乗っているとは思わないか？」
「私、昨日は西ヶ丘の生徒六人に同時に襲われたよー、撃墜したけれど」
ここで撃退――と言わないところが恐ろしい。撃墜って…地面にでも叩きつけたのかよ。プロレスじゃねぇんだぞ。友はおしとやかそうなくせに野蛮なところがある。
だが、俺の検討もそこに焦点が合っているんだ。
「あたしは四人だったぁ！！股間に踵落とし喰らわしてやったよっ！！ぐにゃって顔してアへ顔してたっアへ顔！」
嬉しそうに言うな。それにアへ顔という単語は一文字塗りつぶせよ。ついでに女はそんな下劣な単語をつかっちゃ駄目だろ。
「僕も襲われたね…、速攻で撒いてあげましたけど」
「お前は…一番大丈夫そうだな」
「で、感慨なる時空はどうなの？」

「ああ、当然襲われたよ。俺の家の手前百メートル前後の地点に小さい交差点あるだろ、あそこで前後左右を三人ずつで囲まれた。しかも驚くべきことに周りには人っこ一人いなかったんだ」
「でで、どうやって対処したの？」
興味津津です――と言わんばかりの笑みを浮かばす咲良。この話は結構グロいんだけどな。
「そうなることは予測できていたから丁度何故か道端に落ちていた使用済みのコンドームを拾っていたんだよ。ソレの中身をこう…ずぁあ！てブチ撒いて相手がひるんだところを鬼畜股間抹殺脚で前方一人の一部分を打ち抜いて状況を脱出した」
「サイテー」
今まで見たことの無い空前絶後の無表情を浮かべている友。カランッと俺達の会話を聞いていたとされる周囲で食事しているクラスメイト（出て行かなかった勇者たち）は箸を落としていた。え、そんなに駄目だった？
「ま、まぁ良いじゃないか。それよりだ。運動のできる学校の生徒が積極的に俺達を狙って来てそれ以外が手を引いているのか…言わなくても分かるよな」
「六校で役割分担をしているってことだよね。でも、それじゃあとの六校は…？」
「恐らく、月波子をどうやって瓦解させるかの検討会議中だろうな」
「束になっても無駄なのに…なんて馬鹿な連中なんだろうねっ」
「悪口は禁止だって、そんなこと言ってると足元すくわれるぞ」
「いつもそうやって苦言を呈してくるよね、何かのジンクスなの？」
「まぁ、そんなもんだ。だが、咲良のいう事にも一理ある。向こうが束になっても俺達には勝てない」
「そこまでの現状を持っているのに、詰め切れないこの状態か。最悪だね」
「この抗争の原因の発端が金じゃなければ一瞬で一蹴できるんだけどな…、金となるとどこからか捻出しなくちゃならない。けど、こ

の場合はその捻出できる部分は皆無なんだよな、ぶっちゃけ今日現時点での学校の運営費は校長のポケットマネー」
「どうせ校長も風ｚ――」

［ｇｅｔ　ａｎ　ｅ－ｍａｉｌ］

『ヴヴヴッ――ヴヴヴッ――ヴヴヴッ――』

一文字とローマ字のゼットだけで明らかにエロい言葉だと予測できる咲良が吐こうとしていた言葉を遮断するようにして携帯のバイブレーション機能が作動した。それも四人同時に。
制服の胸ポケットに入れている携帯を取り出し、カシャッと画面をスライドさせて画面でメールを開く。内容はこうだった。

『来たれよ、数多の生を求める者たちよ。このメールの着信日より四十八時間後に《フロア０１１０》で公式にバトルロワイヤルを行う。
なお、これはチーム戦のみのデスマッチである。
恐れるものは立ち去れ、生き残る勇気のある者のみが参加権を持つであろう。
なおこのバトルでは賞金が掛けられている。
その額はなんと一億である。
賞金を狙う欲の塊である者、ただ生き残るという優越感を得たいための者。
誰でもいい。参加による大会への惨禍を心より期待して待っている。
運営委員会――運営委員会長、月波子　蝉』
まさにまさしく携帯に届いたメールは渡りに船であり、この文章はこの時点で既に俺達に勝利と一億を約束していたようなものだった。だが、この内容は不自然極まりなく、大層信じがたかった。―

―『一億』。『そんな金が何処から出るというのか』。『もし出たとしてもソレを優勝賞金にする必要性が何処にもない』。『普通ならばレアな武器やレアアヴァター、課金用ネットマネー』などではないのだろうか。

「このメールの内容からすると巨大な資金力でも持つスポンサーがついたんだねきっと」

友はそんな楽観的な事を言う。だが、運営側もある程度は把握してある筈だ。ネットランキング上位者の名前とそれがドコに所属しているのか。でなければ簡単にポンッと一億を賞金として出す筈がない。

校外不出の情報――というものは少なからずどの教育機関にも有る。月波子の場合は『ＤＥＡＤ　ＫＩＬＬ　→　ＡＲＩＶＥ』のネットランキング百位まで全てはこの月波子の生徒のアヴァターが支配している――という事だ。つまり、実質上でＤＫ→Ａを乗っ取り、支配しているのだ。だが、このメールを送信した。

周りで昼食をとっていた生徒も送られてきたメールを見たのか、チラチラとこちらに興味を示しているように思えた。集団で出るならば必然的に俺は俺達四人組で出場する。それだけで優勝は確定するから。

情報の把握――それは特別難しいことではない。この場合に限定してだが。メールの最後、差出人の名前は《月波子　蝉》。安直な予想でも確実に当たる。この学校の校長に該当する。トップ１００のランカーに生徒会の投資、そして統括者――月波子　蝉。これだけの判断材料が揃えば見えないものも見えてくる。

「蝉は先を望んで何をする気だ――」

途中までは予測できない事もないが必ずそこで行き詰る。通行止めの交差点のように。

「ま、このイベントで優勝すればいいってだけなんだから、楽勝でしょ」

「当然だよね。二つ名持ちは負けない」

「各自の家から繋ぐって事で…いいかい？」
『異議なし！――』

日々の減衰風景。（後書き）

最近仮面ライダーＯＯＯにはまってます。
朝起きてみるのが日課になってます。
タカッ！トラッ！バッタッ！――タットッバッ！タトバタットッバッ！！
耳に残る癖のあるリズムですよね。
自分的には今週の放送で出てきた新しいコンボの恐竜系が好きです。
では。
あ、感想とか宜しくお願いします。

濁った日常。（1／2）

俺は納得のいかない蟠りを抱えている。それは魚の骨が喉の奥で閊えるソレではなく、もっと根本的な――ことだと思っている。

今回のこのメールはギリシャ神話の《アポロンの矢》であり、その半面で《諸刃の剣》であろう。今の状況を分かりやすく説明するとこうだ。

月波子高校は地方公共団体の提案した条例によって自らを合わせた七校全ての権限を所有しており、それは七校合同の実力テストのトップに与えられる権限であり、何年もそれを我が物顔で我が物としている。やはり、この状態は傍から見ると少々面白みに欠け、不満の募ることである事は明白だ。そしてその月波子が意味不明な暴挙――に近いような意味不明の行動に打って出て、ましてや自らにまで危害が加わるとなると黙ってはいないだろう。しかも、その事業には失敗して赤字であり、今年度の予算の返却の目処さえも立っていないとなると憤慨してしまうかぎりだ。そんな状況で事件の根源の月波子の無情生徒会は自身の所有する権限で自身らが所属する生徒会を解雇し、二年である俺達にその職務を委託した。委託した――と言っても俺達はド素人で前も後ろもこの生徒会の仕事に於いては分からない状況である。そこでソレを好機とばかりに他の高校の刺客（笑）が俺達を個別に脅して予算や権限の譲渡を図っているという所だ。

それからだ。この状況を打破して打開する鍵となる一通のメールが届いた。このメールはＤＫ→Ａのアカウントを持っている者になら全員に届き、今頃は全員がこの事実を既知としている頃だろう。この時代だ。家庭用ゲーム機であると同時にオンライン専用ゲームであるこのゲームに当然ほぼ全員が参加してくることは火を見るより明らかだ。それには当然――周囲の六校も参加してくるはずだ。ここでの優勝とはこの混沌とした状況での勝者とも変換できる。

一億有れば今年度の予算も満たし、さらに周囲に貸しとして配分できる。月波子も赤字なので当然火だるまである。俺達が相手が得た配分を受け取るという事は当然貸しであり、相手は即座に貸しの返却を申し出るだろう。権限の譲渡――という形で。それは絶対に避けなければならない。

ここからだ。

俺達が勝利を掴み獲る条件は二つ。

一つは完全勝利。

二つ目は敗北という名の勝利。

完全勝利は俺達――四人の集団チームが優勝し、賞金を手にすることで成立する。

敗北という名の勝利はこの学校の生徒――もしくは周囲の六校以外のチームが優勝である。

賽は投げられた。結局行き着く場所は同じ。学力テストでもこのゲームでも。勝てばいいのだ勝てば。昼休みはいつの間にか会議になっていて最終的には纏まった意見が出たけど、本当にこの方法でいいのだろうか。

俺はこんな悶々とした思考をしつつ帰宅し、夕食を家族と摂り、風呂で一日の疲れを癒し、勉強をした。病は気からとか悪い予感は当たる――とかよく聞くが、俺はそんな精神論から生じる現実なんてこれっぽっちも信じていない。精神論は嫌いなのだ。さっきから後ろ髪を引かれるような考えばかり先ほどからしているが、別にどうってことはない。ただ、今の段階での一番の懸念は他校の襲撃だ。これはエスカレートすると殺人になって下手すりゃ死人が出るぞ。学校は社会だ。一種の学生だけで構成――構築された社会。大人社会で殺人が起こるようにそれは学生社会でも適応されるのだ。

問題の解決に尽力を尽くす…、これが今の現状か。…所詮は。

メールが携帯に届いた日の夜――十時。
俺は十一時の現在、二十四時間営業しているコンビニエンスストアに行った帰りだ。小腹が減って家に何も無かったからしかたなく買いに行ったという訳だ。
俺の家は特に目立った住宅街にあるわけではなく、只の一軒家。一軒家が密集していなくもないような地域にある。そこから歩いて十分ほどの所にあるコンビニへ徒歩で向かってその帰りだった。夏手前の季節の夜は丁度いい具合の温度の日が多い。今日もその内の一つと数えてもいいだろう。半袖に長ジャージという出で立ち。
平和だった。
それと勉強中に考えていた事を適当に扱い過ぎたのだろうか。

誰かにバットで後頭部を強打され、気が付くと廃屋に監禁されていた。

濁った日常。（1／2）（後書き）

ストックがあるのでちょっとずつアップしていきます。
もしドラが最近は凄く楽しみです。
あまり経済の本は読まないのですが、ドラッガーは読んでみたいですね。
ちなみに、私はＡＶ機器をつい先日までイヤラシイ意味で捉えていた浅学非才な人間です。
戦場ヶ原さんに罵られたいっ。
あ、エムッ気は零です。
零崎零識並みに零です。
西尾維新ファンさんなら分かりますよね。
いや、語感で合わせただけですよ。
深読みしないでください。
では。

濁った日常。（2／2）

「…ン、……使イハ……――――――…ウン。……カイ」

ポツポツと断片的に聞こえる声に目が覚める。

…甘く見ていた。平和ボケしすぎだった。気を抜き過ぎていた。

意識の回復に伴う思考の明確化。による現在の思考能力の程度を図っているうちには通常の思考能力は取り戻していた。鈍痛のこべり付く後頭部は無視を決め込むことにした。廃屋だと気付くのには時間を要しなかった。昔よく遊んだ場所――家から五分の築百年以上たっているのではないのかと言いたくなる外観から百人中百人が廃屋と認定できるほどの廃屋だからだ。廃屋の内装は壁度は存在しない。子供の時に俺達が全てぶち抜いた。だから三百六十度全て見渡せる見通しのいい情景となっている。

「おっ、起きたみたい。自分の置かれてる状況理解できてるかいー？」

俺がゴゾゴゾと動き出したのに気付いたようで、壁にもたれて携帯をつついていた加害者Ａが如何でもよさそうに伸びた口調で喋りかけてくる。因みに喋りは男だけど声は女だった。たぶんスケ番的なアレ。

「おーいー？ダイジョブ？意識ある？聞こえてる？しんでない？」

加害者Ａは棒読みにテンプレートな台詞を吐く。まったく学がない。

「聞こえてるよ。俺なんか監禁して何する気だ？」

鬱陶しいと言いたげに（てか鬱陶しい）俺は言葉を紡ぐ。

「あーー、ごめんなー。オレだって好きでこんなことをしてるわけじゃないんだぜー。ちょっち依頼があってねー。あ、そーだ。オレ、誰だかわかるかー？」

「六校の生徒の誰かだろ。学陰学園の唯一の二つ名持ちの『久慈（くじ）匚音（はこね）』あたりか…ってな」

「だぁーいせぃかーぃ！よーく分かったな。やっぱしこの喋り方だなー。うん。我ながら強烈なキャラが立ってると言えるぅぜ。でも少しいただけないなー。学陰学園っちゃそうだけど、この場合は別の言い方をするべきじゃーない？」
たとえば始原の覇者…とか。
「昔の、たった一度だけの栄光にすがるなよ。たしか妖怪でぃたな。背中に掻きついて離れないクソみたいなやつが。そえれと似たようなものだろ。しかもこちらにメリットが一切ないって所でお前らはそれ以下だ。精々タニシと同格だ。で、久慈匚音は俺に何のようだって聞いてるんだが」
匚音は携帯を一度開き、パチンッと閉じて口を開く。
「殺しに来た」
耐えきれなくなった。俺は耐えきれなくなった。
「ぶあはっ、あははははっははははっははははははははっはははははははははははっはははははははははははははははははははははははははっははははははははっはははははははははっ！！！！！！！！！！！！！」
『意識が覚醒した時から堪えていた笑い』をついつい噴き出してしまった。
「なーにがそんなに楽しぃ？面白い？」
「一々廻りくどいんだよ。殺すなら意識を失ってるうちに殺すなり、出会いがしらの金属バットを包丁にするなりで事足りる。『構って欲しい』なら『構って欲しぃ』って言えよ。構ってちゃん♪ははっ、あはは。『お前らはウサギちゃんか？』『一人だとさびしぃよー、ぴえぇーん』か？六校で集まってまだ仲間がいるのかーぃ？」
「…っざけんなよぉ——おぉッ！！」
ガツンッ！と右頬に拳が激突した。ダメージ一（笑）。柱の裏で両手を縛られて繋がれているこの状況でも出来ることはある。殴られた衝撃をズラすことも難なく出来たりもする。この技術は咲良と友からの輸入。あいつら最強だもん。

「おいおいー、チミの拳骨の威力は一かい？そんなんじゃ首の座ってない赤ちゃんも殺せないぞー。
でさぁ、もういいじゃん。さっさと用件言えよ馬鹿が。もう鬱陶しい。まだ平日だし明日も学校あるんだ、あんまし夜更かしとか好きじゃないんだよな俺。なんたって七時に寝ている兵だからなー、オレっ（爆笑）
どう？
特に用事無かったらさっさと解放してほしいんだけど。
俺は君の事なんて全く持ってコレっぽっちも一ピコも興味はないからこのコトは誰にも言わないよ。安心してねー。
さぁ、どうするんだ？
本当に殺す気あるのー？」
「……」
結構扱き下ろしたつもりなんだけど。あの程度で逆上する位だからこれくらい言えば十分理性を無視して暴走すると思ったんだけど…ぐぅッ！！
思わぬ攻撃がぁ、、、、、・・・・、、、っっててえええええ。重心を傾けての突き蹴り。もうほぼっってええ。ほぼサンドバッグ状態。まだ一回しかけられてないけど。
あー、涎垂れた。
「少しは反省したかー。解放する気はない。用件は言ったはずだ。殺すと」
「用件は殺しに来たじゃなかったのか？変わってるぞっとぉおおお」
突き蹴り二発目襲来。華麗に体をひねりかわしてみた。ヅゥウウウウウウウウウン――――って廃屋中に振動が響いた。あぶね。
「で、どうして俺を殺すの？」
一度リセットして会話再開。高等テクニック。ただし相手次第です。
「六校の意志だ。俺がソレを実行しに来た」
うん。なかなか寛大な心だ。スルーしてくれた。けどもうキャラ

が崩れてる。キレキャラなんだな。ゆるキャラに偽装したキレキャラ。おいおい、思いっきり対面のキャラだぞ。羊の皮をかぶったライオンみたいな。
「でも俺を殺してもなんの解決にもならないぜ。俺の後窯は幾らでもある。つーか多分元生徒会長が生徒会長になるって感じじゃなかったかな。俺を殺して誰かが生徒会長の座に着いたらソイツも殺すのか？普通じゃないな」
「殺すのはお前だけだ。
ＤＫ→Ａの優勝候補のお前らを殺すんだ。
賞金を六校で分配する。
それで問題は解決する」
「情報漏洩か。よくある話だな。
別に良いけど。
あとの九十六人はどうするんだ？
こいつ等も俺と同じくこうやって殺すのか？
そりゃおつかれさん」
どうやら初耳だったらしい。ま、当たり前か。がんばって俺達の情報は集めたが後の人間のことなんて眼中になかったらしい。
「ほーら、タイムリミットは四十八時間切ってるぜ。百人伐り達成できるかな？殺戮者よ。あー、たった今、俺の中で君は加害者Ａから殺戮者Ａに変更されました」「あ、もちろんＡはアッポンタンのＡだぞー」
「もう、これ以上お前と話す事もないな」
おいおいおいおいおいおいおいおい、沸点低すぎだろ。
匚音はシャリンッとナイフをベルトから引き抜いた。大方後ろで鞘に入れてベルトに縛り付けてたんだろう。けど、ナイフの扱いは傍目から見てもドの付く素人だった。業界ではトーシロ。だから、それで本当に『殺す気あるの？』
ブチと音をなるべく立てずに俺は腕を縛っていたロープをナイフで切り、殺戮者Ａが振り上げていた（俺が縛られているからどうふ

っても必ず当たると思って振り上げている）ナイフにナイフをぶつけ、相手の握っていたナイフを弾き飛ばす。キンッ！と火花が一瞬散って相手がナイフを落とす。握り方がなってない。まず、自分が優位に立っていると心の余裕で握り方が甘くなる。素人なら専らだ。

一瞬にして身体に神経が通ったみたいに皮膚の感覚が敏感になるのを脳の端で感じる。

相手が初めてのナイフとナイフの交差によってビビっている隙を突いて突き蹴りをする。やりかえしだ。これは俺の分。これは柱の分。これはクリリ〇の分！！

ものの数秒で相手を制圧する。喧嘩さえしたことないやつだった。蹴りを二回喰らっただけで失神した。殺戮者Ａの上着を切り取り、長い布にしてから俺と同じ境遇にしてやった。扇情的な光景だった…とは言い難かったが。

「駄目駄目じゃん。『執念の怨念』はこの程度か。たしか肉体面から付いた二つ名って聞いたんだがな。名前負けしてるよこれじゃ」

廃屋のドアに手を掛け、出ようとしたところでソレは起きた。

「がぁあああああああああっ！！！！！」

ヅゥゥウウウン！！

振りかえる。そこには両手首を血まみれにした殺戮者Ａの姿が映った。コイツは自分の力で布と柱に挟まれている両手を抜けださせたとでもいうのか。アリエナイ。絶対に自分の力じゃ抜けないようにしてたんだぞ。

右足を軸にした回し蹴りが視界を潰す。いや、回避したけど。廃屋に溜まっていた埃がぶぁっと舞い上がり、鼻に、喉に、目に、皮膚に、不快感を訴えかけてくる。

ッいたあ！！

回避して気が緩んだ所で右手に激痛が。見ると人差し指中指の根元深くまで噛みつかれていた。

「いってぇんだよぉお！！」

ナイフの刃先を左手で変え、左手で拳骨を作り、殺戮者Ａの額に

当て、静止力が出来たところで思いっきり力いっぱい右手を引き抜く。
じょりじょりと骨が皮膚一枚と肉をはさんでこすれる痛みをはっする。歯で圧迫されて痛み上昇。引き抜いた後の指は掌と甲側の皮膚はなく、うっすらある筋肉も根こそぎそぎ取られていた。あの歯に。血がピチャリと零れるのが自分で分かる。とってもイタイ。空気に触れてるだけでいたい。
反動で殺戮者Ａの動きが浮いた間隙に刃の方向を持ち替えたナイフの柄で殺戮者Ａの脳天にガツンッと振り下ろし、一撃を与える。
かなりの威力。
瞬く間に殺戮者Ａは昏倒して脳天を押さえて悶えだした。踵で背中の肩甲骨の所を打つ。痛みを発するのが背中というのはかなりこたえるものだ。一番神経に近いからかな。
こんどこそ相手を無力化してドアに手を掛ける。廃屋の腐りかけたドアはギィィイと音を立てて開く。
財布以外、ナイフしか持って来ていなかったのが起因したのか、どうやら相手はグループではなく単独だったようだ。
ああ、ナイフは靴にかくしていた。靴底に外から取り出せるようなギミックを仕掛けていた。これはネットから学んだこと。二回目の蹴り突きを避けた時に不自然ながら左足を手元まで持ち上げ、ナイフを抜いた。辺りが暗かったのが気付かれなかった原因かもな。
「ぐうー、さっさと帰ろ…そういや、俺のコンビニ袋は――無いよな…」
がくっと肩を落としながら廃屋を後にする。てか、血が止まらないんだけど。右手が血で真っ赤。
「ま、待て、まままま待てぇえええええええええええっ！！！！」
気温が高い夜はよく声が通る。もはや爆音を通り越して轟音と呼ぶべき声を発した生物の方を向く。後ろに振り向く。
月明かりに照らされて顔がよく見える。綺麗な顔つきをしているんだが、もはや殺戮者の顔つきだ。下顎から血が滴ってる。頬から

顎にかけて血が流れてる。絶対近づきたくない。
「勝負アリアリだろ最早。これ以上やっても意味が無いってば」
「終わって、いない。お前を殺す、まで――「はぁ、ムリだってば」
」
俺も懸念していた。肉体面よりの呼称である『執念の怨念』はこの程度の打撃では撃破出来ないのか。
あー、鬱陶しい。
「俺の二つ名は『執念の怨念』。一つの事に固執する醜悪な姿とソレを可能とする強固な肉体から発生したこの二つ名を持つ俺は殺さない限りは止めることが出来ない。
さぁ、どうする。
鉄砲も数撃てば当たる。どんな素人でも玄人を上回ることはできる。
体力で振り回せば。その間に殺されなければ」
「あー、お疲れ。けれど…そろそろなんだよ。最終兵器が到着するのは」
腕を空に上げ、指でカウントする。
スリィ――トゥ――――ワン――――ゼィロ。
音は無かった。完全なる無音。
真空の中であるかを錯覚させる。
闇を纏い、纏われる暗殺者。
ソレは敵に対して無情。
ソレは味方を守る友情。
ただただ真っ直ぐに関節を伸ばした腕。俺の視界に現れる月に照らされて月光を浴びてうっすらと反射するキメの細かい皮膚。
拳。肘。肩。
俺の視界を埋め尽くす。
正拳突きが相手の鳩尾に確実に入る。
目の錯覚であろうか。動きがスローに見える。
拳が入り、相手が呻き、身体の筋肉が凝縮したかのように見え、

足元が浮き。
そして、後方へブっ飛んだ。
加速による運動エネルギープラス完璧な重心移動による正拳突き。
ここまでの威力になるとは。
さすが『無情なる友情』。
素晴らしい。エクセレントだ。
暗殺者は軽いフットワークでこちらを向く。
「大丈夫、怪我とかない？」
「この右手…すっげー格好いいだろ」
「うん、すっごい痛そう」
「うん、すっごい痛いよ」
やってみる？と聞いたら脳天にチョップされた。地味にイタイ。
「でさ、オチたアレ？」
「一撃必殺だからね」
「執念の怨念だぜ？信じていいんだよな」
「アレを喰らって起きあがったら流石にヤバいよ」
「それはそうだなー」
軽い会話を交わして家路に着こうとする。
「ぐ、ぐぁあああああああああああああああああああああああああああああ」
「おいおい…起き上がってきたぞ。どうなってんだ友？」
「あちゃー、もしかして肉体面からの二つ名？」
「ぐれいとぉ」
「カポエラ決めてくる…」
鬼か。
グシャッ！！
聞いたらヤバイ音が鳴った。
地面に両手を付けて両足で相手の頭をロックして地面にたたきつけてる絵がそこには存在したことを一応目に焼き付けておこう。
「…かえろう、感慨なる時空」「そだな」

さすがにもう起き上がることはなかった。
友の穿いている靴の内側に血が付いている所は見なかったことにしよう。
それにしても役に立つもんだなーＧＰＳ。靴に仕込んでおいてスイッチを押すとＧＰＳが作動して、もう一度押すとＳＯＳのモードになる仕組み。流石は無常なる友情。良い仕事をする。…ストーカーになりそうだな。

意識を手放す前に匚音がこう呟いていたことを二人は知らなかった。
「マホウツカイガクル――――ニゲ、ロ」と。

濁った日常。VERSION　1．11

「…――――――ッブンッ！」

誰かがテレビのリモコンの電源ボタンを指の腹で押す。この時代のテレビは全時代のブラウン管仕様のアナログは時代の端へと追いやられ、デジタルテレビというハイビジョン画質のテレビが流通している。一部では世界初のホログラムテレビという未来感溢れる、胸躍るテレビもある。

リモコンから放出された赤外線は反射し、テレビに当たり、電源が入る。朝のニュース番組。出勤時間が五時代や六時代という健康を通り越して不健康ではないのかと言いたくなるニュースキャスターを眠たげな眼で見る。ピシッとした端正なスーツを身にまとい、朝からはきはきとウザったくなるように喋るニュースキャスターが今朝も実際にあった事件や出来事を大袈裟に淡々と喋っていく。

芸能人についての与太話。芸能人より一般人の方がもっと凄いことをしていることは言わずとも知れた、事実である。

幼児虐待やら人身売買やらのダークな話。住んでいる現実とあまりに乖離しすぎてニュースキャスターの腹式呼吸からなるハキハキとした喋りは只、耳を無駄に通過していく。

次に話すことは地元の事らしい。

言葉を紡ぐ前に一度えー、という言葉を間に入れる癖のある二十代の若手の人気のあるそこそこ美人のキャスターが朗々と読み上げる。

「えー、　昨夜十二時頃に××県×××市で高校生四人が殺されるという殺人事件が起こりました。

殺されたのは月波子高校二年、蓮回時空（１７）、壱奈岐友（１７）、空垣咲良（１７）、荒峰乙夜（１７）、の四人らであり、全員が違う場所で発見されております。

この不可解な殺人事件は四人の死因が共通しており、全員がナイフで心臓を刺され、即死だったと思われます。
なお、蓮回時空さんの頭部にはバットか何かで殴られたような跡がありました。
なにより不可解なことは全員が同じ死因であるにもかかわらず、死亡推定時刻が全員一致している事です。つまり、全員が同じ時間に別々の場所で殺されたという事になります。それに、全員に刺さっていたナイフの柄には全員同じ指紋が検出されており、偽造されている…という事はあり得ないようです。
なお、蓮回時空さんの右手にも傷があり、犯人ともみ合ったと思われます。
犯人の特定は未だ出来ておらず事件は未だ解決されておりません。
警察はこれらの状況証拠から複数犯のグループ犯行とみて捜査を続けています。
今朝も随時捜査を進めるという予定です」

「えー、では次のニュースです――――」

地元のニュースはまだ続いたが、これ以上の凶悪な事件は発表されなかった。キャスターもごく普通というような様子だった。

どこの知らないテレビを見ている誰かはフンっと鼻息を出し、こう思った。
今朝も普通の日常だと。
地元の事でありながら重要視しない。
これが人間というものなのだろうか。
いや、無関心なだけである。
無関心――――無頓着でありたいのだ。
そう思い、どこのだれか――筑ヶ　説『つくが　せつ』は学校へ行く準備をしだした。月波子高校へと。

だが、そんなことはあり得ないだろう。
――死。
これは絶対的な事象であり、逃れることが出来ない。
だが、この事件は異常だった。
一目見ればそれは一目瞭然。
だが、『なぜこの程度の騒ぎにしかならない』のだろう。いや、
――『騒ぎにさえなっていない』。このニュースを聞いている人間はこの事実に『疑問を抱いていない』。
まさしく異常である。
普通なら取材陣が被害者の親族へ取材をしたりするものだ。
裏で何かしらの圧力が働いた――ワケはない。
それならばニュースとして取り扱われる筈がない。
ならば、――どうしてこのような中途半端な自体が起きるのか。
――全てが謎だった。
それは、月波子にこれから登校する――筑ヶ　説でさえ気付いていない。

二つ名――『天才添削視（スペルチェッカー）』を持つ彼でさえ。

排他的魔法使いと今日。日常帰還戦争。（1／？）

――――記憶の本流を第三者の視点で見ている自分を見ている自分がいる。
タダの夢なのか、現実なのか、分からない。
情報が混然として、判断がどっちつかずだ。
まるで――右目は左、左目は右を見ているかのような不可思議さ。
本流の水がはねる。俺の視界に跳ねた水滴が通りすがる。
水滴の中には記憶が――映画のように流れていた。
左右反転の記憶の映像。
これが脳に流れる。――――――――。
俺は意味の分からない矛盾が嫌いだ。
意味の分からない矛盾――というのはおかしな話だが。
言い換えると理不尽な矛盾が嫌いだ。
例えばの話――ゲームや漫画などでよくある魔法使い。なぜ現実では絶対にありもしないのにこんなに周知なのだろう。人間の想像力。それに妄想力。これは素晴らしいと思う。だけど、それにずっとおんぶってのはいただけない。持論だが。
だから、ファンタジーなんかも受け付けなかった。けれど、このゲームは違った。
ＤＥＡＤ　ＫＩＬＬ　→　ＡＲＩＶＥは違った。
全てが現実と近似し、不条理な攻撃は一切なく、全て自分が出来る範囲の行動で行われる。恐怖だってあるし、撃たれた時の感覚だって疑似体験できる。銃と格闘だけだが、これで十分だ。この二つが醍醐味。
もしも、このゲームがアップデートされて魔法の要素が入ってきたならば即刻に自分のアカウントを消去するだろう。
一位のスコアを持つアカウントを。
この世界はこんなのばかりだ。

戦争。言葉を聞くだけでウザったくなる。それほど嫌いだ。
だからだろうか。俺がこのゲームにはまったのは。
子供の空想みたいに戦争を無くしたかったのだろうか。
大人の虚言のように強くなりたかったのだろうか。
どうでもいいよ。
疑似感覚だけど、人を殺すってな感覚は凄い。
凄いの――――一言に尽きる。
一瞬の高揚とそれに続く後悔の念。なのに立て続けに殺すとその感覚自体が《ナニ》かとの摩擦で摩耗してどんどん当たり前になってくる。
だが、俺はこの感覚は自分の『欠落』していて、『欠陥品』であることをまざまざとしらしめてくることを自覚している。
《ナニ》か――俺はコレを常識と呼んでいる。
これも疑似かと思っていたけど、ソレは違った。
そこまでの高度な演算は出来ないんだと。
高度なプログラムは組み込んでいないんだと。
この事実をある場所で知った。
このゲームのバグのデータの容量に『住む』というキャラクターに。
たった数バイトの空間に巣食うデータに。
自称ゲームマスター――キリヤに教えてもらった。
自分自身に絶望したね。いや、渇望したのか。
もっと殺してみたいと。
自分の中に秘められている殺人衝動の衝撃に歓喜した。
昔から欲の無い奴だといわれ続けてきたこの俺。言われるのは当然だった。
ベクトルが違ったのだから。
物欲や金に対する欲望ではないのだから。
そりゃ――正反対の対面の存在だろうな。
いや、ほんとに。

自分はどれほど稀有な存在なんだろう。
考える必要はない。
少なからず皆持っているモノなのだから。
で、最初の話しに回帰しようか。
俺は魔法が嫌いだ。嫌悪している。
魔法は悪だ。
なんだって魔法の所為に出来るから。
なんだって魔法で解決できるから。
なんだって魔法の力が最強だから。
なんだって魔法は当てはまるから。
だから、目の前に魔法を行使するナニかが現れても否定するつもりだった。
まぁ、まずそんなことはないと思うけど。
あの夜、友と別れてから邂逅した、――いや、アレはわざわざこちらに向かってきた。偶然という運命的出会いだったのだ。
一つの欠片が俺の視界を遮ったのだ。
いや、一つの闇というべきか。
とにかく、銃や暴力よりも轟々として台風のような存在だった。
そして、一つの闇は有るべき姿へと成った。
彼女――少女は、聞いたことの無い言語を口ずさんだ。
まるでゲームや漫画によくある《××》に近い発音だったことを記憶はしかと焼き付けている。
その後、何が起こったのかは知らない。
ただ、一つ覚えていることは、胸に激痛が走って一瞬で意識が暴風にでも吹き飛ばされたように掻き消えたことだ。
そういえば少女は右手に悪意しか見受けられない形状のナイフを背握っていた。
意識は残っていたのかもしれない。
どうやら俺の脳にはその理由が録音されている。んだろうか。
なんとなくだが――――そんな気がする。

今思えば俺のこの何とも言えない感覚は――相当オカルトチックな事に起因したのだろうか。

遙か空高くから自分の体を視覚が捉えていたのだから。…幽体離脱ってやつ？

少女はナイフを右手に握り、刀身には――持ち主の、彼女の血がぽたぽたと伝っていた。鮮血に染まったナイフ。

――――死んだのだ。と思い至ったのは意識が起きて間もなくのことだった。“死後の世界”なんて想像はなかったが。そんなチープな想像は地を這うより無様だ。ま、この年になると想像というよりは妄想の部類だよな。

意識が覚める前にあった出来事が濁流のように流々と今や忘れ去られたアナログの極みであるテープレコーダーのように脳に再生される。最後は暗転だった。死んだ後の走馬灯って一番無駄じゃないか。

「はぁ、ここ――どこだよ」

マジで死後の世界かよ。

辺り一面灰色の世界。空は曇天。こちらが苦しくなるような灰色の空。惨憺としているが、昔はさぞかし繁盛していたことが窺われる町。栄枯盛衰の四文字熟語が上手に当てはまる光景だった。俺はその町の中央に位置するであろう大きな噴水のある公園のベンチに倒れていた。

服装は制服になり、種類は判別つかないが絶対にあり得ないモノが腕に付いていた。こんな物体を『メビウスの輪』とかいうのだろう。奇妙にダイアモンドやパールの様な鉱石が綺麗に捻れて、ソレが腕に嵌っている。しかも、継ぎ目なく別種のメビウスの輪を創っ

ている鉱物の腕輪が目では数えられない（自分で言っても意味不明）が腕に嵌っていた。
しかも、音がしない。物質ではあり得ないだろ。物理でもないしな。
「重さもない…変なの」
ここで気付く。
ファンタジックな展開が待ち受けている可能性に。
背中に冷や汗が滝のように流れてシャツがピチャっと張り付く感覚が妙に不快だった。
最悪だ。死んだのに苦痛が待つとか。
えーと、状況を整理整頓しようか。
コンビニへ行って酒を買って、そこらへん飲んで、一時間ほど時間を潰して帰宅しようとした。うん、記憶はバッチリあるな。
そこで――うーん、襲われて――撃退して――認めるのはこちらとしては不本意極まりないが一応仮に魔法使いとして、記憶にある少女に殺された。そして今に至る、と。
うん、完璧だ。
「なわけねーっ！！」
ノリ突っ込みを入れてしまうほど俺の精神は病んでいるのだろうかっ？（真剣に）。あと、異常に声が響いた。夜なのか？でも明るいぞ。
――それにしても、生物の気配が全くしない。木々はもちろん、雑草一本見かけない。全てが無機質に囲まれている感じだ。しかも、現代の科学では考えられない愚かしいローテクな技術結集であったであろう建造物ばかりだ。
過去にタイムスリップ…とか。あ、けどそれじゃあこの荒廃した世界のつじつまが合わなくて矛盾するか。まさかのパラレルワールドなんかしちゃったりしてな。はは。
「全然違うよー。ここは魔法の世界、ティルワールドだってば」
「……――――――っ！」
いおいおいおいおい、焦り過ぎて「い」から始めちゃったじ

ゃねーか。
いや、そういうことではなくてだ、心の声に返答するって無敵じゃねえか。しかもあからさまなロリじゃねえかよ。
「だーかーら、ここは魔法世界ティルワールドなんだってばっ！」
無視するなぁーとブリっ子な声があとに響く。
声の主は一体どこからこちらに語っているのだろうか。
俺の視界には映っていないんだが…、空にもいない。あるのは灰色の重圧な雲のみだ。やべ、幻覚見てるのかも。あー、今確かに俺普通の精神状態じゃないしな…。
「あー、ごめんっ。魔法解いてなかったっ、ごめんね☆」
すると、俺の真正面に――噴水の丁度上空に位置するであろう場所にドロ――と現れた。まるで空間が溶け落ちたみたいな感じだった。
しかも声に同調するような「ド」が百個ぐらいいてソレを六乗したみたいな超「ド」ロリボディーの少女が箒に尻を乗っけて浮いていた。
――――勘弁してくれ。
「私はこの世界の主――『Ｌｅ（リィ）』、よろしくねっ☆」（しかもイタイ）。
「よ、よろしく…俺は――」
「あー、いーよ。知ってるしねー。蓮回時空って名前なんだね。変なのー」
手足をバタバタと振りながら笑うリィという人物。きゃははとシニカルに軽快に無垢な笑顔で笑う。
でも、今コイツ魔法って言ったよな。
――魔法世界ティルワールド。彼女の言葉を鵜呑みにするなら、目の前にいるコイツは――――、
「戯言（たわごと）・戯言（ざれごと）は抜きにしないか――、《魔法使い》」
「ばれちゃってるのかー、うん。いいねぇ。その洞察力。私は好きだよーそういうの。けどー、この世には知らなくていい事実ってあ

るんだけどなー」
「白々しい。自分でここまでヒント…正解を振りまいといて今更知らない振りとは」
「…あはははっは！せーいーかーいーっ！」
魔法使い――リィは尻を箒に乗せたまま、器用に両手を上に掲げて歓喜のポーズ（ロリｖｅｒ）をとる。バランス感覚がきもちわりー。
「それに、俺はし、…――ｓ」
「死んだはず――かなっ☆だいせーかいっ。蓮回は死んでその魂を私が魔法でここまで連れてきたってカラクリなんだけど…あーオーケ？」
「ノーだ。大体まず、どうして俺が殺されなきゃならない」
「依頼されたんだよっ」「誰に」「ひーみーちゅっ」
「お前ッ――」「カリカリしなーいっ、こんな些細なことで」
「黙れ、ふざけるな。こちらは状況が一切理解できていないんだ。ちゃんと分かるように説明しろ。俺を殺した奴にこんなことを言うのは論外なんだろうが、今はお前しかいないからな」
「はー、別にいいけど。だーけど、『ちょいと口が悪いんじゃないか、若造が』。私は善良な魔法使いであり、魔女であるから蓮回の魂を呪魂しなかったし、無闇やたらで闇雲な肉体も与えず、元の肉体を再現し構築してやった。さらに思考力――精神も復元してやった。いや、連れて来てやったという言い方が正しい。しかも、他の奴らから狙われないように私の創った世界にまで登場させてやった。それなのに、それであるのに、それ以上の事を望むというのかお前は。命知らずもいいところだ。他の三人はもっとマシな対応だったわ。ただちにお前を殺すことだって可能なんだぞ。速攻一瞬で間隔を開けずに６１２３回ほど一秒で殺すことが出来るんだぞ。己が身を弁えんか。お前は状況をつかめていないだけでなく、ちょっとしたパニックにもなっている。そんな不安定な精神が私に抗議するな」
「――…、お前は、いやあんたは何時如何なる理由で俺を殺したん

だ？」
「…ふんっ。お前だのあんただの代名詞のオンパだな。リィと呼ばないか。まぁいい。お前だけ…違う。前提から違うんだよ。私は殺してなどいない。ふんっ、ちったぁ人の話を…魔法使いの話を聞け。それに、お前だけじゃない。あと三人しんでいて、全員の魂を回収した」
「さんにんって…そりゃ、俺の予感は当たらずしも遠からずってわけじゃないようだな」あと三人――――容易に想像がつく。
「そうさ、だーが、ここで一つ問題が発生した」
「もんだい？」
「そう、復唱してくれてるところ悪いけど、どうしようもできないどうしようもない現実を提示させてもらうよ」お前を含めた四人の魂を私は手中に収めていた――が、ソレを横から文字通り横取りされたんだよ」魔術師にね」そしたらどーだい、その魔術師は去る間際に私の世界をここまで壊して去っていきやがったんだ」酷いと思うだろうー？そこで、だ」
「ちょっと待て」俺は少々ズレたことをベラベラと惜しげもなく喋りまわるロリ魔女に静止を掛けた。ついていけない。話が飛躍しすぎだ。俺の中で噛み合わない。只でさえファンタジーが嫌いな俺は予備知識が無いことは無いにしても、それでも程良く零に近いんだ。それなのに魔術師がどーやら魂がどーやらと厨二みたいなことを言われてもこちらが御話しにならない――うえにだ、本質的にも御話しにならない。
「話す速度が速すぎだし、まずおかしいだろ。《どうしてお前はそんな一方的な喋り方をする》んだ」――――《頭に響いて苛々するんだよ》。
「ああ、これか。なんてことない。ただの、ただの――――――――《魔法》だ」

排他的魔法使いと今日。日常帰還戦争。（1／?）（後書き）

西尾維新絶賛――講談社ノベルズから今月発売した、「酸素は鏡に映らない」は

かなりおもしろいです。

こんな自分の小説の話を全くしない作者でしたとさ。

イラストレーターの「ｔｏｉ８」の絵もかなりイイ！！

「まおゆう」を呼んで文章・イラスト（ｔｏｉ８）に感銘を受けた直後の話でしたとさ。

めでたしめでたし。

ではなく、少し話を。

今回の話の切り方は尻切れトンボっぽいです。

なにとぞご了承を。

病気の男と魔術師と駒。日常帰還戦争。（2／準備）

「――――魔法だ」

数秒の空白が開いた。

「――――――――…っ！！？」

おい、おいおいおいおいおいおいおいおいおい、恐ろしいこと言い出したぞコイツ。いや、魔法使いっていう設定は知ってたけどさぁ。ああ、既知の事実だったさ。だがな、こんな小さな会話にまで魔法を織り交ぜるのか魔法使いという輩は。ヤバ過ぎだぞ。魔法使いにとっての魔法ってのは殺人鬼にとっての得物みたいな奴じゃないのか？ここぞという時に繰り出すものだろ。ソレを日常的に織り交ぜ、しかも相手に気付かせないようにするなんてどんだけなんだ。こんなにヤバイ奴なのかよ！

「（――――はぁ、もう散々だ。）」

「ん？ナニか言った？」

「いーや、一言たりとも喋っていない」

「そうだな。魔法で読みとったから、…何考えてたかは分かる」

「もぅ嫌だっ！」「ジョークだよ、魔法使いのジョーク、差し詰め、マジックジョークと言ったところか」

「もうどうだっていいよっ！！」

「ま、この会話自体どうでもいいし、意味の無いものなんだけれど――この世界には原因も結果も存在しないから」

…ちょっと待て、それじゃあ――――。
「因果律から外れた――――世界ってことか？」
「ふっ、『良いところ』に気付いたな。そう、この世界――ティルワールドは因果律から外れ、全ての物理現象が物理現象として成立しない世界――――」
「ソレが本当なら、俺も、あんたも、因果律から…外れていることになる」
「ま、そうだな」
「だったら――――」
「だったら、私達は何者か？か」
「そうだ」
「人だ、逆に聞くが、お前は何者だ？逆説的に考えずにも、解はあるだろう」
「…――――っ！」
「ここは森羅万象に干渉しない世界――――因果律…つまり、《いついかなる事象も時間的に過去に起こったことを原因として起こる》ことが無い世界だ」
「魔法による時間に依存しない独立世界。いや、時間外世界。過去・現在・未来も存在せず、今俺達のいる地点はただの点であり、三次元に時間を加えた四次元の枠外の点である、か」
「そう、だから――因果律を受けない。受け付けない。寄せ付けない。受けないから――――この世界の情景が存在できる」
「どういう意味だ？」「さぁな」「因果律の不干渉――ソレが魔法か？」
「半分正解――いや、四十三点かな」
「これだから魔法は気に入らない。殺すぞ、魔法使い」
「やってみろ――と言いたいところだが、さっきも言ったようにお前なんて赤子の手を捻るより簡単に殺せる。今は私に従うのが得策ではないのかな」

「…くっ」
「緩和休題だな。私はその魔術師と敵対しているんだよ。そこで去り際にそいつは私にこう言い残した。
『お互い駒は二つずつ。いつぞやの続きをしようじゃねぇか。今度は俺が勝つからなぁ。覚悟しておけよ。改造したらそっちへ仕掛ける。お前も準備しておけよ』

とな。あ、このメッセージも魔法だ、私の記憶から抽出してお前に植えつけた。
この時、俺は気付いた。コイツは俺で遊んで暇を潰している…と。まず、俺の魂を自分の世界に連れ込むなんてことが出来るチートレベル（推定）の魔法が使えるのなら、俺の記憶をスキャンすることなんて朝飯前なんじゃないのか。そうだとすると今のこれは只の挑発でしかない。俺の頭に送り込んできたこのメッセージなんてのも口頭で十分な文字数だろう。ソレを魔法で態々伝えるって…悪意の塊だろ。つまり遊んでいると。てか、このリィっていうロリ少女一体何歳だ？絶対肉体と精神が釣り合ってないだろ。こいつお得意の魔法で肉体だけ若面気取ってないか…、確かファンタジーのこういった展開のお決まりのパターンって年齢が三ケタ後半――――ッ！！って…友がいってたような…「…もしそうなら普通死んでるだろ、その年齢までいくと」
「ああっ！人の年齢探ってんじゃねぇよ。ぶち抜くぞ！ったく、「警告おせーよ」あーあー、話がズレちまったじゃねーかよ。でだ、本題に戻るぞ…――蓮回っ☆」
「やっぱしババァか…、役の演じ方に年季が入ってやがる。それも数十年単位の」
「次言ったら殺すよー、わりかし本気で」

「……」

「私は本音から言うとこの戦いに是が非でも勝ちたい。だから協力してくれ――――頼む、この通りだっ」そう言ってリィは箒から尻をどかし、空中で土下座した。いやー、これまで数々の人間に土下座させてきた俺だが、ここまで清々しい清涼とした土下座は見たことが無い（空中で…という意味での清々しさと先ほどまでの態度が嘘のように掌を返してくるリィの態度が清々しいを掛けている…一応）。だけどいただけない。一応リィはミニスカートを穿いており、当然空中土下座というものは俺の視点が下から上へ見上げる形で無いと認識できず、そのミニスカートの中身までも……見えることになる。

「（…青と白の縞々のストライプか――萎える、おいっ、しかも具が出てるし…、しっかり細部まで幼児体型を造りこんどけよ）んー、遠慮しとくわ、幼女嫌いだし。じゃね」ま、速攻否定してやったけど。即決即断だ。今は立場的に俺の方が上だし。

「酷過ぎないっ！？」おおー、土下座状態から全く身体を動かさず、返答してきた。それに免じて…「じゃあまずえろぼでぃーに成って」要求を通してみようか。ふふふふふ…。

「かーー、…従うしかないよね。《トランスフォーム》！！――…これで、どうっ！」

ここでも評価は速攻で――「最高だね、言う事なしっ」魔法の使用というファンタジー要素に多少頬を引き攣りつつ、だがそれも次の瞬間跡形もなく払拭された。光源の知れない光がリィを包み、一瞬にして二十六歳あたりの完熟したぼでぃーに魔法の名前通りに肉体を変身（トランスフォーム）していた。因みに服の方はデフォルトでサイズが変わるらしい。

俺は恥ずかしげもなしに声高々に言い放った、「うん、いいねっ！」と。対面のリィはというと…多少の複雑な表情を浮かべていた。

「では、協力してくれるのだ「いや、別にしないけど」な…は」漫画風に表現するならぱぁぁと顔を綻ばせているところにキツイ一言って構図だな。いや、ねぇ。えろぼでぃーに成った位で協力とかマジあり得なくね。
「まず…って言っただろ。次はそうだな――…服を…、ゴホンッ、コスチュームを「おい、言い直す方逆だろ―」変えてもらおうか。そのパーカーにミニスカート、二―ソックスって格好も好みだけど、水着になれ」
「お前…ファンタジーが嫌いなんじゃなかったのか」「何を言うか、魔女は水着にローブが基本だろう。友が言ってた」
「では《ガーメ「色は赤一択だからな」ン…ガーメント》！！トランスフォームの時と同じく、光に包まれ赤の水着（流石に俺が言わなくても通じていたのか際どいビキニだった）で黒のローブを纏っていた。…おい、「黒のローブなんて注文はしていない、ただちに外せ――馬鹿野郎っ」
「でもさっき水着にローブって」「ソレは基本だ、俺は応用する男だ」「ぐ…それは退化とか後退とかいうものではないのか…」
「さっさとしろ！」
何故か俺はテンションが高い。いや、なんでだろ。楽しいんだが。
リィはばさぁとローブを肩から外す。すると、ローブはファアと無数の黒の粒子に成り景色に消えた。「これで「その次だ」…まだかぁ」

中略、これが体感時間で一時間ほど続いたので。

最終的にはＯＬスーツ姿で落ち着いたことをここに記そう。

「はぁーー、これで話を聞いてくれるのだな」「もちのろんだ」感慨深しく息を吐くリィ。
「では、聞いてほしい。予想ではあと数時間中にも対戦が開始され

る。なので、お前にはその戦いに勝利してほしい」
「えらくあっさりと、且つすっきりしている内容だな。それで、対戦って具体的には何をするんだ？」
「……殺し合い」
「よしきた」「ええっ！」
「どうした？俺は了承したぞ」「普通は否定するなりするモノなんだが…」
「俺はある家庭用オンラインゲームにはまっていてな…」「既知の事実だな。なんたって私はそれ関連の依頼でお前を殺そうとしたんだからな」おい、今こいつサラッと凄いこと言いやがったぞ。てか、ようやく話が戻った…？のか。
「学陰学園の生徒会長に魔法陣で呼ばれて、殺しを依頼されて、殺そうとしたらもう殺されていた」「あー、もういい、後は想像できる範囲じゃないが長く刈りそうなんで後で聞く」「あら。そう」
「で、私のメンツが掛かっているからこの戦いで勝利してほしい。もちろん、相手は殺してほしい」言い分は理解はしていた。していた…筈なのに、どうしても享受できないでいる自分を自分で見つめる。対戦者…駒は互いに二つ。だとすると、こちらは俺にもう一人。向こうは二人。当然だ。だが、駒がリィの殺した人間の魂であるならば、あとの三人は俺の友人に位置する人間の可能性が高い、友。乙夜。咲良。この三人である可能性が。先程は簡単に殺すと断言したが、本当に殺せるのか。友を。友達を。
「なんだ、やっぱり迷っているんじゃないか。それでこその人間だな。
　私はてっきりこのままスッパリと割り箸のように割り切って戦いに臨むものだと思っていたぞ、もう一人の方と同じ反応だなんて、新鮮味に欠けるな。
　ん？
　もう一人が誰だって？知らんよ。私はアイツには興味が無い。
『無い』だけにな。「どういう事だ？」

そんな個人一人の感情を汲み上げる余裕は私にはないから簡単に説明するぞ。
この戦いはサバイバルゲームだ。どちらかの全滅――絶滅でゲームの幕は閉じる。お前は相手――二駒を壊せばいいだけだ。
手首に嵌っているソレは私が授けた。んまぁ、ソレが在れば速攻楽勝で惨殺できる筈だ。まぁ、――――――――――――がんばってくれたまえ」

「私は魂を魔術師に攫われた時、《お前の魂だけ》は死守した。それほど…お前の《病気》に期待しているという事だ」

「…そこまで知っているのか、いや、知られているのか」
突如世界が歪む。魔法使いの姿は明確には見えなかったが、口元には笑みが刻まれていただろう。唇を釣り上げ、嬉しそうに――にやける残酷な笑みが。

お客だ。そう聞こえたら視界は反転していた。

反転したのは色なのだが、黒が――白。白が――黒へと。真逆の位置に位置する色に変換していた。
今まで空には鈍重な雲のみが存在していた。今は薄らと《青い太陽》が見え始めていた。太陽光は普通に青じゃないんだな。これも、因果律から外れた世界だから出来るってことか。

「やぁやぁ、これはこれは、偉大な愚か者の魔法使い――リィ、この度は私の勝負事に乗っていただいて感謝に感謝を重ねても足りないほど感謝してるぞ。こちらの駒は十全に最強を獲得しているんだがぁ、そっちはどうだ？」
「いやいや、落ち着きなー、小物の中の小物の魔術師――オォ。今回はまた面倒で発案者の脳のレベルが丸分かりな程阿呆な勝負を持

ちかけてくれて前回同様私にこうも簡単にカモらせに来てくれてアリガトウ。こちらは手心を加えに加え、加え切った上になにの知識も与えずに駒を遊ばせていたよ。最弱を獲得さえもできないんじゃないだろうかな、それでよければ、相手をするよ」

どうやら互いに互いを売り言葉に買い言葉で安い挑発をしあっている様子だった。少し離れた場所に立っていたのは黒いローブを着た長身の赤い目が特徴の髪を肩辺りで切りそろえた綺麗な顔立ちをした魔女だった。いや、魔術師だった。

そして――――――――――――――――、

堕落した死と生の隙間。日常帰還戦争。（1／？）

「やーやー、現世振りだね、感慨なる時空。私はこの理不尽極まりない勝負はしたくないんだが、どうだろうね」「それはこちらとしても同じだ。まず、俺は得物をもってないんだがな…」「私の武器はこのベレッタだよ、感慨なるがゲームで私に無残に惨殺された銃。どうかな気分は」「最高に最悪だよ、最悪に最高でもいい」

魔術師の横には友、そして――、

「やっほー、元気だったぁ？って、死んでるよね、あたし達っ」

元気に黄色い声を振りまいていたのは咲良だった。二人とも制服。

「敵同士、正々堂々殺し合おうよっ。ねっ？」

返答に困るコメントをする。だが、おかしい。コイツらがこんなことを言う筈がない。だいたい、友は絶対にあり得ない。二つ名はその人間の本質を表している。咲良ならいざ知れず、友に限って二つ名に逆行することは決してない。それほどの信頼は俺達にはある。ならば、

「あと一人が見えないがぁ…、まぁんなこたぁどうでもいいかぁ。早速始めようか。急いで始めないと、飽きちまうからなぁ」「そうだねっ」

ここで、『あと一人』についても言及しない咲良、こんなの絶対にあり得ない。情報が届いていない事態も想像できる。だが、俺達三人だけいて、あと一人がいないことは必ず不自然に思う。ここで、俺の操られているという疑惑は確信へと昇格した。

「ははっ、せっかちな奴は死ねばいい」「言ってろ、リィライト」

「おいおい…」

魔法使いと会話していた魔術師は話の隙に魔法を唱える。

リィライトと言った瞬間、世界が変わった。障害物が多数ある、そう、この光景は幾度も目にして、幾度も駆け抜けて、幾度もここで自らの命を散らした。

ここは……――――ＤＥＡＤ　ＫＩＬＬ　→　ＡＬＩＶＥのステージに酷似している。
　曇天の空は変わらず、だが、空にはホログラムみたいな立体の文字が浮いていた。ＢＡＴＬＥ　ＦＩＧＨＴ！！――子供か、てな。つまり、もう殺し合いは始まってるって事か。俺はひとまず足音を立てずに岩陰に隠れる。
　ここは一切トラップの無いゲーム初心者が初めに通るステージ。山に面している村の設定だったはずだ。そして、山側にはかなり大きめの体を隠すのにはもってこいの岩がゴロゴロ転がっている。その内の一つ、手近な岩陰に隠れる。

――――ッ！？　不意に思考にノイズが混じる。ノイズは痛みを発し、頭を通りぬけた。痛みの間隔が狭くなる。

ジジ――ジ――――ア、アアアア、聞こえてますかぁー？

　そのノイズはやがて繋がり、無線機の様な声が聞こえ出す。リィの声だ。また魔法か。嘘くせぇ技術だなおい。
「聞こえるよ」

――喋らなくても念じるだけで聞こえますけど、あなたナニ、魔法初心者？普通漫画とかの主人公なら速攻で喋らずにコンタクトできるように適応するでしょ、うわぁ、滑稽っ。あ、因みに嘘くさいとか無いから。まずコレ技術じゃないから。考えてること筒抜けだからー。
　だまれ、カス。ちょっと聞き分けの悪い自分に都合の悪いことを論点をずらしてうやむやにしようとしているような漫画の女子高生がしているような喋り方をるするな、ババァ。あと人の脳内盗聴するな。この盗聴器（笑）。

――酷い言われようっ。ま、許して使わす。それより大事なこと言い忘れてた。聞くか？

聞かない…――と言いたいところだが、聞かないわけにはいかないんだろ？

――聞かなかったらアナタハシニマス。

急に片言になるな。怖い。

――それほど重要だってことだよ。

聞くしかないだろう。

――その腕に嵌めてるの変身アイテムだから。

ええっ！おい、知ってるだろ。俺がファンタジーが嫌いな事を。

――知ってる。だが、お前の才能を一番引き出せるのはそのアイテムだったんだよ。…知ってるか、魔法って使うと楽しくなるんだぜ。

格好良く言っても無駄だ。どうすんだよ。変身して戦えってのか。あいつらの武器は銃だったぞ。俺にも銃くれよ。俺には『そういう事』は絶対に無理なんだ。だから銃くれ。

――あームリ。私銃とか知らないし、知らないってことは作れない。まず、私は魔法使いなんだよ。そっちの分野は魔術師の仕事。

意味分からん。魔法使いと魔術師の違いとか知らねえよ。この使

えねえカスが。ってどぁあああああああっ。

――どうした？

隣の岩を咲良が素手でぶち抜いたっ。まじビビった。

――拳士ってやつだそれは。接近戦は間違いなく即死だぞ。

どうすりゃいいんだよっ。

――だから変身。

変身はどうやって？

――おっ、乗り気だねぇ。

おっじゃねえ。自分の命が危なくなったらなりふり構ってらんねぇンダよ。

――嘘、《そんな事》絶対に出来ない癖に。…身勝手な言い訳。

不機嫌になるな。アッブ！回し蹴りはヤバいって！

――心の中で変身って唱えな。あとのフィッティングとかは何とかしろ。

なんとかなんて曖昧な言葉で濁すなっ。

――実は私もソレを使ったことないから何なのか分からなんだよな。つまり完全なブラックボックス。ただ魔法系を使えるとしか。

っざっけんなぁっ！！

俺は先ほどの咲良の蹴りをステップで避け、一旦距離を図る。

――あいつはここは因果律が発生しない、物理現象が違うと言っていた。

ならば――、

思いっきり下に沈み、浮上する時はばねのように、で咲良の懐に潜り込み、顔面に拳を打ち込む。右ストレート。だが、ソレを顔を引くだけでかわす咲良。近接戦闘のど素人な俺はそのまま姿勢を固めたまま、ひざ蹴りを繰り出そうと――、咲良の左が腹に入るっ！振りかぶらなく、振り子の要領で拳をぶつけられる――それだけなのに、一メートルほど『吹き飛んだ』。

次の衝撃で自分が今どこにいるか気付く、岩にめりこんでいた。背中いてぇ。

「――…っ――かぁッ――――っ――ッ――――！」

後から来るこの呼吸が出来ない症状。心臓が――イタイっ！

咲良がやったんだ。右手で心臓に拳を打ち込んだ、で――衝撃でこの結果か。

俺はあまりの意外な非常事態に一瞬硬直した。

銃撃者がいることを知らずに。

いや、『狙撃手』の存在を知らずに。

次の瞬間、俺の肩の関節、膝の関節の計四か所を『同時』に弾丸が砕いた。

「がぁああっ！！！！！！！！！！」

狙撃された。狙撃された、イタイイタイイタイ、いいいいたいっ。打ち抜かれた瞬間に一瞬で身体の力が抜けて立てずに重力に引きずられるまま落下した。イタイイタイイタイ――――――――――、生きなきゃ、生きなければ、ベレッタでの速射のスキルと狙撃のスキルはない。ライフルじゃないんだから！どうして？

「ミスった、そう思った？感慨なる時空」友は図々しくジャリジャリと地面の土を踏み、足音を立てて俺に近づき、銃口を俺の脳天に付きつけた。早い終末だ。そういや死んだのって週末だったけか。

「はっ、ぜん、ぜんだ。甘いな。頭を打ち抜いていたらはやかったのに。俺にナニかをする時間をお前は与えてしまった。友。それは同時に敗北を意味するって事を、教えてやるよ」

「甘い、のは時空の方だよ。その台詞の言い回し、空想とリアルを同一視している時点でもう敗北している」「俺ほどその言葉が似合わない奴はいないいな…、だけどそれはどうかな」

「どうにもならないって事、知ってるくせに」音を立てて銃口をぐりぐりと頭皮にこすりつけてくる。四か所の痛みが激しいのに、しっかりと頭皮の痛みも脳は感じている。

――大丈夫か？

決めた。決めた。決めた。決めた。魔法使いなんて職業はまっぴら御免だ。魔法使いのチートっぷりには嫌気がさしている。ソレを自分がするなんて吐き気が込み上げる。

だが、楽しいんだろう？

――…あ、ああ、あああ、ああああ、それはもう楽しい。お前の世界には麻薬ってのが在ったただろう。まるでソレをしている感覚だ

といわれているな。ダウンが無い麻薬だ。
ア、アア、ヤバイ――――この感覚、気が×う。

それは、それは、それは、それは、それは、それは、それは、それは、それは、、、、、

『楽しいそうだ』なぁ。

――おい、お前狂ったんじゃないんだろうなっ！？

リィの、まほうつかいのこえがきこえたきがした。

ククククっ、はぁはははっははあああはははっはははははははははははっはははっはははははははははははっはははっはははは――――――――――――、
「撃っちゃいなよっ、さっさと終わらそうよっ」
「そうだね。つまらない、本当に初めから詰んでいて詰らない…勝負だった」
「何かいい残すことはある？」飽きたのか、時世の句を要求してくる。俺はまだ走馬灯さえ見ていないというのに。一度死んでいるがな。まったく、笑えない。
一度だけだ。一度だけ、俺は俺で無くなることを決めよう。ただし、もうこれっきし、二度と俺に接触するな。俺は決めたんだ。こいつ等を殺すと。魔法を…使うと。そして――病気に殺される。この先どんな試練が待ち受けるのか分からない。だが、魔法だけは使わない。俺は誓おう。誓って、この誓いを楔にして、力にする。俺の思考が何処から沸いているのかも検討が付かない。そんなことどうでもいい。今はどうでもいいんだ。力を欲するならソレと同等の対価を消失させる必要が必要だ。なら、この思いを力に換えよ――

―。

今までを思い返してきて、どうしてあの殺人ゲームにどっぷりハマったのかは言うまでもない。慈悲も無慈悲もない真剣勝負に魅了されていたのだろうか。それとも、人をリアルに近い体験として殺すことに興奮を抱いていたのだろうか。どうしてだろう、どうして友や咲良はこんな行動をするのだろう、原理が分からない。いや、そもそも殺人という回路はこの二人には無い筈だ。あっても感情で押さえこめるはずだ。理性が勝ち、感情が負ける。いや、感情が大敗する事態は万に一つもアリエナイ。あのオォって魔術師の仕業だ。魔術師なら魔術でも使えるんじゃないのか。まぁ、そんなことどうでもいい。ところで、俺はどうしてこんなヤバい思考を思考してるんだろう。一瞬前、決めた筈だ。魔法使いに成ると。なのに躊躇っているのか。躊躇しているというのか。ふざけるな。ふざけるな――ふざけるな。まずこの勝負はおかしい、どうしてこっちは一人だけなんだ。もう一人――乙夜がいない。勝負として成立していないではないか。どうせ、魔術師や魔法使いからしたらどっちでも一緒なのだろうか。『ゲームと現実を同一視するな』これが俺の教訓の様なものであったのに。どうして率先して破ろうとするのか。打破しようとするのか。これは俺を取り巻いていた帷であったのに。やはり、この帷が踏み切れない、つっかえであるのだろうか。それこそふざけるな、だ。

振りかえれば――両目で察知できる事柄のみを信じ、皮膚で感じれる感覚のみを信じ、通じ合える人間のみを友として信じてきた。所詮、俺はこの程度の小物だったのだ。幅の小さい小物。最強の二つ名を所有しているのに本質は最弱なんて、…滑稽だ。

振り切ってやる。格言の一つ、ぶち壊す。ジンクスの一つ、ねじ切る。

消失する。俺という存在を、消失させ、変換し、再起動する。

デリート――デリート――コンバート――コンバート――コンバート！

一度だけの自身の消失では生温い。全てを殺す。全てを変える。俺が俺で無くなるように徹底的に、徹頭徹尾、竜頭蛇尾は許さないっ。

画竜点睛は欠かないっ！！！！

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ――――……」

「バイバイッ――感g」慨という手前で銃のトリガーを引く。ズドォンッと俺の頭に銃弾がめり込み、骨を貫通し、脳を抉り、眉間から排出され、カンッと儚い音をたて、地面に小さな埃を舞い上げる。脳漿が眉間から漏れ出るのがすりガラス越しのような視界で認識する。

そんな悪夢の事態をもろともせずに俺は更なる思考を行えるはずもなかった。

感慨なる時空――――蓮回時空はここでこの時に死んだ。視界もブラックアウトした。ここで、脳を弾丸が貫通してからブラックアウトする間の一瞬の出来事を語ろう。

走馬灯なんて走らなかった。一瞬の出来事過ぎて、一瞬の記憶辿りも行えなかった。

だが、一つだけ、思い出した。どうしてこの言葉が思い浮かんだのかは知らない。ただ、単純に『印象的』だったのか…。この記憶を廻ったのは走馬灯より、銃弾より早い事だけは、確かだった。

『――――――知ってるか、魔法って使うと楽しくなるんだぜ』

最高……だっ。タイミング的には神だな。

帷（とばり）はもう俺に纏ってはいなかった。

走馬灯は流れなかったが、死ぬまでには一瞬が無限大にまで引き延ばされるんだ。意識の跳躍。意識の――拡大。――意識の肥大化。
ああ、なんて長いんだ。まだまだ死ぬまでには時間がある。
『肉体』が『死ぬ』までには――だが。
この間に、俺の《精神》は気が遠くなるほど、気が狂うほど、キチガイになるほど――――、死んだ。これこそ、自殺。
死んで、再生して、死んで、再生してをただ従順に繰り返す。
この《病気》の所為だ。
俺が、――――俺では無くなる。
自我の消失ではなく、自我の失墜。
自我の崩壊ではなく、自我の変貌。

――――ぎゃははははっははははっはははっははははっはああ――――――――――――――！！！！

何千回の死を迎えた時だろう。
何千＋N回の生を迎えた時だろう。
尋常ではない意識のモウロウを重ねる中、ようやく終点となった。
俺は――――――俺だな。
他人ではない。
それほど、病んではいないんだな。
ようやく、一瞬の出来事の中の、一瞬の突き通るような思考をすることが出来た。

嗚呼、そう言えば知らないんだな。友と咲良は。

一言、一言呟くだけで俺は……――――――――、

《魔法を使える者》に変身できることを。この《思考》を《施行》させる！

――――――――――――――――《変、身》。

××の日常帰還戦争（1／？）。

灰色にしっぽりと包まれた世界に、僕は一人取り残された。

ってのは嘘。

こんな小説のポップみたいな書き出しで自分の心境を語ってみようと思います。

本当は、始めから僕以外誰もいなかった。

心細くは――――ない。どちらかと言うと惨めな気分です。

凄惨に笑いたくなります。

ああ一つ、変化したことがあっりましたね。

何も感じない。

五感がほとんど働かない。

触覚――――無理。

味覚――――無駄。

痛覚――――放棄。

聴覚――――はありますね。

視覚――――当然ありますよ。

いや、意外と働くような。

「こうして僕は生涯孤独の道を歩むのでした」

なんて嘯いてみるけれど。

「生涯孤独と言うよりかは天涯孤独と言うべきですし」

「天涯孤独と言うよりかは人外孤独と言うべきなのかもれないかもですかね」

こうして僕は、僕の物語が始まりました。

免許皆伝ならぬ、外伝ですかね。

どうやら記憶を辿ってみたところ、僕は死んだようですね。

あの日はどうしてか外に出たくなる気分になって、――――外に出ていたら殺された。

――――――――――…っはは。

どうでもいいですね。

自分の人生に未練なんかないですからね。

生まれたときから――僕は××なんですから。

一片たりとも×を実感した事なんてありません。

――――こんな自嘲を吹いても意味がありませんね。

では、そろそろ動きましょうか。

この緞帳な時の止まったような世界を。

飽和した悪意と狂気。感慨ｖｓ重荷（１／１）

『リィライト』と呼ばれた言葉により世界が変革された後、――――二人の魔法使いと魔術師は《外》から《中》を傍観していた。

「お前の駒――――女王（クィーン）じゃぁないのか？」

「どうして、そう思うんだ？」

「こっちの駒は二体、そっちの駒は一体。当然強さが求められるからなぁ。なおかつ、最強――はクィーンだぁ。チェスであっても、コレであってもなぁ」

「どうして、――――そう思ったのかは私の知る限りじゃないが、一つ教えて置いておく。誰が一体だけと言った。どこのどいつが駒は一体だけだと勘違いしている。それと、――――アイツは駒に置き換えるのなら、絶対に兵士（ポーン）だ」

「――――っ、『まさか――――――』

思考が遡行する。

俺が中略した部分。その会話が蘇る。脳内を闊歩する。

今となっては遠い過去の存在であるカセットテープレコーダーという録音再生機器があった。この再生はソレに似ている。

無理やりガガガガガガガガガガと音を立てて意識の本流が舞う。

「なあ、魔法ってどんなことが出来るんだ？」

基本的に何でもできる。ベース自体が無いんだ。

まず前提が違う。魔法使いは『魔法を使える』んだ。

使えない魔法がある時点でソイツは魔法使いって括りにはいられないだろう。

魔法使いに必要なのは独創性とやる気だ。

逆に不要なものは何だと思う？

「…そうだな…、感情…とかか」

残念、不正解。不要な物は自分と常識だ。
魔法ってのは人知を超えた先にある人間の次の在り方なんだよ。それなのに人間の常識が残っていては何の意味もない。ただの魔法使いの肩書を持つ人間だ。魔法の魔の字も使えやしない。逆に魔法に使われちまう。
「魔法に使われる？」
そう、魔法を行使する段階で逆に行使されるんだ。火を生みだす魔法を使うとしよう。その魔法を常識をもって放ってしまうとどうしても矛盾が生じる。人間単体では火を生みだすことは絶対にできない。これは良いな？でも魔法はソレを可能にする。この段階でもうアウト。常識を持つ人間からしてこれは人じゃないよな。中毒だ。だから魔法使いは一種の麻薬中毒者みたいなものなんだ。「で、人を喰らう魔法は――」
それは文字通り、人を喰らうんだ。呪い返しって知ってるか？人を呪わば穴二つ。これは聞いたことあるだろう。そっちの世界でも私の住んでる世界でも、その言葉は格言として、存在している。それと同じだ。不完全な魔法は術者を殺す。つまり、喰らうんだ。そして術者を喰らった魔法は禁忌の魔法に成ってしまう。こういうプロセスなんだ。

まぁ、まずは自分を捨てるところからだな。
「何も考えるなって遠まわしでいってるみたいだぜ…」
なぁに、後先考えずに一直線に愚直に突っ走ったら余裕だって。
「そんなもんなのかー、まぁ魔法なんて死んでも御免だけど…」

――――前言撤回、現時点を持って徹頭徹尾、俺は魔法を使う。

俺の《病気》の症状は《様々》だが、精神と肉体。この二つのどちらかに必ず依存している。――ま、これは生物としては当然。
そして、《俺》が今の《俺》であるためには、一つの欠陥を受け

入れなければならなかった。この《欠陥》には名前が無い。
――――『想像症』。
俺はこう名付けた。この欠陥の症状は――空想、ファンタジーなどは精神に異常をきたす。だ。アニメでも、漫画でも、小説でも全て平等にその症状が訪れる。
だから、先ほどのファンタジー…変身することを決めるた時、俺の精神は異常をきたし、ソレが飽和し、幾度とない死を迎えた。
だが、それもおわりだ。
同じ薬を何度も服用していく内に肉体はそれに適応し、だんだんと効果が薄れて行く。
これと同じ。
マラソンで３０００ｍ走ったとする。初めはとても辛い。だが、次回の走行ではその辛さも多少緩和される。
これも同じ。
――――経験値が溜まるのだ。次に起きる事象が分かっていたら対応できる。
精神異常も同じように緩和される。俺の場合はされた。
一度より二度目、二度より三度め、四度より五度目。だんだんと――精神は欠陥を埋める事を適応される。
だが、一つの欠点がある。
スズメバチの毒に対する抗体が出来ると、再び毒を受けるときにショックを受けて死ぬ確率が存在する。――アナフィラキシーショックのように。
それが、俺の肉体でも起こったのだろう。だから、数え切れないほど死んだ。

脳内再生が終了した瞬間、俺は魔法を使っていた。
俺の心の声は、『生まれ変わって』の第一声は、産声は、

――――――《生きたい》、だった。

コピー機にはその名通りの動作をするために、コピーの対象の文体を自身に取り込むためのスキャンの機能がある。それで対象を把握し、次の動作をおこなえる。それがまさに俺の肉体に行われた。人間から違う生き物へ、進化を遂げるために。

ブラックアウトした視界に、文字が浮かぶ。けして光を持っているのではない、ただ――浮かんでいるんだ。見えるだけで、光を持たない。希望的観測を行って出てくる希望に成りえない、文字が浮かぶ。

―ＳＣＡＮＩＮＧ　ＮＯＷ《診断中》――――Ｗ（完了）ＡＳ　ＯＶＥＲ。

魔法を使える人種へと変貌するために。これは死であり、復活であり、再生だった。気分上々。

―ＦＯＲＭＡＴ　ＳＲＡＲＴ《初期化開始》――――Ｗ（完）ＡＳ　ＯＶＥＲ（了）。

変な気分だ。自分なのに、自分じゃ無くなる。自分色に塗りたくってきたキャンバスという人生観、使用してきた絵具という方法。これらが全て無かったことにされる。生まれてきた状態に強制に戻される。いや、初期化される。

空っぽになる。――伽藍洞に。

―ＣＯＭＭＩＴＴＡＬ　ＴＯ　ＷＲＩＴＩＮＧ《書き込み中》――――Ｆ（完了）ＩＮＩＳＨＥＤ。

だが、記憶は無くならない。精神も…異変は無い。つまり、さっきのは、魔法を使うものとしてのイレギュラーをオートで部分的に

初期化していたという事か。そして、失ったものを埋めるために新たな情報が書き込まれる。心の中の疎外感…的な物が埋まっていく。まるでテープレコーダーの録音機能だ。所詮はアナログ。ディジタルではない。まだガガガガガガガガガガと不快な音を掻き立てて書き込んでいるようだ。

ＲＥＢＯＯＴ（再起動）――――ＯＰＴＩＭＩＺＡＴＩＯＮ《最適化》。

ガガガガガガガガ――――――ガチャッ。録音が止まった。

血管を血液が淀みなく流れるように、体中を《ナニカ》が流れる。どろっとしてる何かが。

気分が高揚する。体の中心から沸々と湧き上がる。

――――ＦＩＮＩＳＨＥＤ（完了）。

――――ＰＯＷＥＲ（起動）。

……どうやら、俺の人生は――――ここから始まるようだ。

と言っても人間としての人生はちょいと前に終了しているけれど。強制終了だった。いや、Ｃｔｒ＋Ａｌｔ＋Ｄｅｌｅｔｅの方じゃないよ。

パソコンの電源ボタンを長押しとか、コンセントを引っこ抜くとかそっち系。

ホントに本当の強制終了って感じだろ。

ではでは、新しい自分とご対面――――。

視界が元に戻った時には、闇からすりガラス、そしてクリアな風景を認識する頃には、友と咲良は俺の周りにはいなかった。

身体を起こし、立つと少しだけふらついた。ぐらっと。まるで、新しい体の扱いに慣れていないように。ぐらりとふらつく。
視界はクリアなくせに耳鳴りがボーボーなる。誰だっ。汽笛を鳴らしているのは。そんな奴はいねぇ。↑自分でセルフ突っ込み。
だが、そんなことより先にすべきことはいくつもある。↑セルフスルー。
――捜さなくては、視界が上空からの視界に移り変わる。これも《魔法》。『無意識下の魔法』……なのか。命名するなら『第三の目』かな。
上空からの視界で、しかも過疎っているこの辺りにいる人間を捜すことはそう難しいものではない。
すぐに見つけた。のんびりとだらだら歩きながら二人で駄弁っている。
あいつら俺を殺したと思ってどっか行ってやがる。
身体を慣らす意味でストレッチしながら（自分視点もしっかりと存在する）友と咲良を《目》で追う。俺の四か所に打ち込まれていた弾丸と弾痕はきれいさっぱり消えていた。当然――頭の貫通個所もきれいさっぱりに修復されている。

「これが…、魔法」
――俺が願ったから。それじゃぁ、ま、殺さなきゃ…だな。
殺されるまで、敵対するまでは仲のいい仲間だった筈なのにな…。
てか、仲のいい仲間って意味分からんし。仲間だから当然仲良くて、仲がいいから仲間なんじゃ……。
欠けの無い純粋な関係であったと言えるのに。
でも、その関係は今や崩れ、死んだ末にまだ殺し合いをしているんだ。
滑稽だ。
この思いをあいつらに伝えることが出来たらどれほどいいか。
――なんてな。

いざとなると、《感慨》にどっぷりと浸る、俺。
どんな場面でも、絶体絶命でも、どれだけ優位に立っていても、かならずここぞという時に感慨に浸る。それが、《感慨なる》の名を冠する理由だ。
一度目を閉じよう。考え過ぎは良くない。

思考停止。

素早く打ち切らないとズルズルと引きずっちまうからな。せっかくの魔法に矛盾か生じる余地が生まれたら大変だしな。

試行開始。上手くない言葉遊びだ。

「――てか、俺達がもし殺し合うとしてもこれだけは言えるんだよな。相手を殺す時は必ず銃撃戦で止めを刺す」あ、これ伏線だからな！

ＤＫ→Ａの大会に同じチームで出ようとしたよしみだ。慣れ合いじゃなく…な。
俺は――魔法を行使した。具現化しろ。両手が空気ではなく、何か金属を握る。それらはグッと重く、一気に重量で肘が真っ直ぐ伸びる。うん。こうでなくては。うんこ、うでなくては。句点を入れてみた。別に他意ない。うん。
感覚ではなく目で確認する。たしかに握っているのはＤＫ→Ａの初心者に初めに支給される最弱の武器――《スミス＆ウエッソン》の《Ｍ６０》があった。戦後の警察官に支給される一般的な拳銃ではなく、チーフモデルの警察署長に与えられる拳銃だ。若干の王道を外してくるところもこのゲームを好きである理由の一つだ。これを二丁持ち、二人を殺す。殺すだけじゃものたりない。惨殺、虐殺、銃殺、しなくてはならない。って、いつの間にか視点が一つに戻っ

てる。もう一度、上空からの視点に切り替えを…。
――見つけた。
もう一度切り替え、周りの光景をスキャンしてリアルタイムでその光景を脳に情報として送り込んでいる。そんな所だろう。
ふん、これだから魔法は《オモシロイ》。あひゃひゃひゃひゃっ。
ささ、会式の辞は終了したよ。物語りで表わすとプロローグがやっと終わったってところかな。まったくもって一体こったいどうなっているんだ。
《魔法》は文明の機器などと呼ばれる幼稚なものではなかった。
俺は願った。二人の前に行きたいと。
――――《テレポート》したのだ。一瞬だけ、意識に空白ができる。それを認識する頃には目の前の景色は一変していた。
数メートル先にはこちらを見る、二人。
唖然と――
友。
呆然と――
咲良。
心境はそれぞれあるだろうが、くみ取ってやる暇は与えない。それにどうやらあちらも俺と同意見のようだ。流石だ。
流石、ランキング上位者と言ったところか。
俺の姿を視界で捉えるなり、速攻で殺しの構えをとる。一度殺した相手がドウシテ生き返っているのかなんてこれっぽっちも考えていない様子な二人と対峙する！
拳士と銃士。
近距離と遠距離。
対してこちらは、
魔法使い。
全距離（オールレンジ）！！
「ハッ、――勝てる気しかしない」
小声でうそぶいてみる。それほど気分は良い。自分を見失ってし

まうほど。
一足先に前に出たのは咲良だった。アップダウンの緩急で体を左右上下に揺らしつつ、こちらにかなりの速さで接近してくる。それに、その姿をしっかりと目視することが出来ない。まるで『何かの隙間をくぐっている』ようだった。
が、遅いな。
テレポート時に自動で創られた一対二個のガンホルダーに納められていた《Ｍ６０》を素早く抜き、ダンッダンッ――と両拳銃で同時に撃つ。
当たるはずがない。咲良はそう思っていたのだろう。その通りだった。咲良には一撃も当たらず、かすりもせず、後方へ飛んで行った。もう眼前に拳が見えた。
だからどおおおおおおした！！
眼前の拳は上空からの弾丸により手の甲から平にかけて銃痕が生まれた。つまり、銃弾が貫通した。
ピシャッと血が傷口から漏れ、俺の頬へ付着した感触を味わいつつ顎を引いてひとまず拳を回避する。フォンッと撃たれてもなお勢いを崩さなかった拳は空を切り、一撃必殺を嫌でも認識させられる音を出す。風が頬を打つ。
『あえて、拳を待ったのだ』。
隙が無いからな。拳士には。
そして続けざまにもう一発。咲良は完全に忘れていた。貫通による二重の意味（肉体と精神）の衝撃と一撃必殺と思われる体重移動による渾身の一撃を避けられたことによる体のバランスの多少の崩壊で。
俺が初めに撃ったもう一発の事を。
そして、その一発もまだ生きていることを。
全てはこのための定石。定石のための布石。
次の瞬間、鮮血が咲良の眉間から迸った。――眼前で命の略奪行為に俺は興奮した。脳をやられた身体は重力に隷属を確約して地面

へと落下する。
だが、彼女の拳は留まりを見せなかった。
脳に穴が開いてもなお、その拳を奮う――――信念。
いや、それともただ操られているだけなのか。
”” どちらでもいいことだ””
両手に握る銃での早打ち。
一瞬の中に拳が肉片と化し、地面に散乱する。
キシシシシシシッ！！

ドシャッ――――と音を立てて地面に倒れた彼女は、片腕を失っていた。

飽和した悪意と狂気。感慨ｖｓ重荷（１／１）（後書き）

ひっさしぶりのｕｐデス。

囮物語は西尾維新にヤラレタ―と思いましたね。

まさかラスボスが……！！

という事で次回作の忍の話が楽しみで仕方がないですなー。

ではでは、ナニかいい事あったらいいですっ。

お相手は雨宮天でしたー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9068s/

腐った日々の消費を謳歌する日常

2011年7月10日03時50分発行